

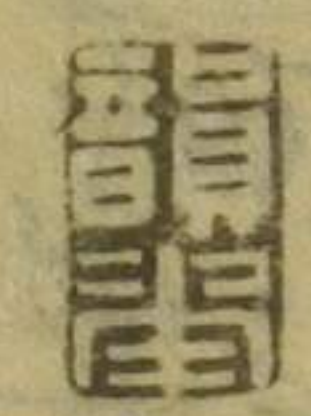
於菟子譯述

啓蒙 智慧之環

瓜生氏藏

41, 7747

題首



余屬官文部与瓜生君
為同僚日与議學制余
目不識洋字每有考西
歐諸國之制必積之者

文部省

君間出示其所謂述啓
蒙智德懷方夏文小學
生徒讀考支那之書
迂濶無實際其文難明
我邦人所譯洋書文義

多歧晦澀不明了是乎文
至近理至安尤為今必
用因急從速刻之以惠
天下小學生徒始聞知
教書家之勤豈止小學生

徒身也哉
 明治壬申三月文部少丞
 撰并序



啓蒙知恵の環巻の

第一篇 總論

第一課 物の論

團の... 部の書... 一... 羽の雀... 一匹の馬...
 一本の針... 一片の葉... 一張の椅子... 一點の星... 一種の...
 冠等の如き... 人の目... 能見... もの...
 之と名づけて... 物... 其中に... 椅子... 針書... 冠等の...
 もの... 人の作... なる... なる... なる... なる... なる...
 木... 雀... 馬... 葉... 星... 人の任... 所... 乃...

於菟子

譯述



天地の自然に出で天神の造
り王たす一つるところなりしを
天造の物と名づく

第二課 天造の物及び
生物の論

凡そ天の造まる物の中に生
り馬うま雀すずめ木の類るいハ生なかき物ものとの別わかり
ものにて之と生物といひ星
石の類ハ生なかき物ものにて只ただま



れと物とぶくくして生なたる物ものとハ稱なづまるるべし

第三課 人類の論

人類ハ天造中の生なりし物ものにて最も勝まさりて貴たかき
ものなり故ゆに万物の靈たまと申まをする形かたち体たい何なにり
靈魂たま何なにり形かたち体たいだんく生長せいじやうして大おほきくなり
嬰兒えいごより次第しだい長ながくく十歳じゅうさい前後ぜんごと幼童ごうどうといひ
二十歳にじゅうさいより成人せいじんといふ但たゞ身体からだの長大ちやうだいハ極きまるる處ところ
何なにり心こころ智ちの小こより大おほきくなるるに至いたつつてハ識しくく進すすみ
んて遵したがふ養やしなふる極きまるる事ことと曉しるり
事ことと辨わべる物ものと愛あいするる杯さかづきハ皆みな左ひだり龜かめの何なにり故ゆなり

凡人ハ能是非と分別も事と得る物にて諸物
に超へて其行ふ所の事皆必も神明の照覧あり
所なり此旨ハ我
皇國よて々上古開闢の始りよ於て早く教へ示
玉へり

第二篇 身体の論

第四課 首の論

人の身にハ百体ありて其最も重かるものハ首
ホして次ハ腹背次ハ手足なり首ハ總身の上よ
りりて頭と顔の二箇より成る項額後頭額顔の

類ハ皆々頭の内より内ニ脳髓あり外ニ蓋あり
髪ありはく之と守護も頭の前ハ即ち額なり

第五課 顔の論

顔の内よりもの々眉なり目なり頬なり鼻なり
り唇なり額なり眼なり鼻なり鼻の孔より鼻の
鼻ハよく嗅ぐ内に兩孔あり鼻の孔より鼻の
言ひ食ふ為の用なり此物さへめて屈伸易
故に歯牙ありて内より支へ以て肉へ落むぬ
うにもろかり

第六課 胴の論

人の身の最も大なる處は胸とつゝ其部位を合
りてつゞきさへ肩胸兩角腹背腰なり胸の上
と背といひ胸の兩旁は脇とつゝ脇骨は胸背
の骨に相つゝなる胸の内は心と肺との臓
なり其下部は即ち腹なり腰なり

第七課 上肢の論

身の上肢を合て云へば腕とつゝ腕とつゝ手
といひ指といひ腕は肩と以て胸に連り腕は
脇に連り手は手首にて腕に連り指は手
節にて手おつゝなる人々小腕腕兩脚兩手十指

有り手の内と掌といひ手と指と拳といひ

第八課 下肢の論

身の下肢より腿あり脚あり足あり趾あり腿は
腰に連りて脚は腿をつゞなり足は脚に連り
て趾は足に連りて人々に兩腿兩脚兩足十趾あり
り足の後と踵といひ足の上と趾といひ足の下
と蹠といふ

第九課 骨節の論

人身の部位をなすは活動するものなり其動
處は乃ち骨の節あり肩腕手頸脚膝頭脚跟の

如きや、骨節の如く之と身内の
の大節とて手の指足の趾杯
こそ小骨節甚だ多し脊骨
のよく強く能く伸ぶる骨節相
連なりて一本の胴骨となま
不由り頭の動くハ乃ち脊骨
の上より二節の工合より
なり

第十一課 筋骨等の論

骨の最も堅要なりとのを乃



ら蓋頸骨物骨缺盆骨脊骨肋骨髑髏骨手骨腿骨
脚骨足骨等あり身内の骨おのり其巧よりりて
位置と失はぬハ筋と腱とより物のよりりて之と
保持せざる故に由る筋とを乃ち赤肉の事なり
とハ筋の端よりよく骨に固着してあり

第十一課 心肺二臓の論

血ハ心の臓より出て動脈管より一身を周る
運行て其後静脈管より帰りて心の臓に入
る其とき色に紫黒に變まる心臓の臓に入る
前肺の臓を経て鼻より吸ふとあらの空氣

と得て復清くありて持ちまへの赤色にうへてお
、おおるて重わく心の臓よりまゝと周身に循環
して暫も止むときなり

第十二課 飲食休息の論

凡そ人々飢ゆるるときは食し渴くるときは飲む食
に飽き飲で足まば乃ち止む起て事夜の身勞
れ倦めば則ち休し息を眼瞼をまを則ち瞋り足
まば則ち覺む其時精神をよとまをやのなり毎日
うくの如くふく又循環してやまざるなり

第十三課 身の功用的論

人の命を養ふもの臓腑の功用的なり臓腑はま
く食物を消化し其内を食物ハ漸く凝融して血
となり其用なきものは大腸よりおろり出して
尿となる既に血と成りたる時ハ心の臓より過
身は運を是れ心の臓の用なり肺の臓を空氣
と呼吸する機經あり心臓の功用的は日夜止む
て寐ても寤ても同くまをかり必しはては虧け
損も時を病となり絶て死をまかり

第十四課 身外の動作の論

人身の百体其まを少き一なまを能く操りま

持ちよく打ちよく牽きよく行きよく走りよく
 飛びよく躍りよく立ちよく坐りよく卧りよく
 く見よく聴よく嗅ぎよく味びよく感よく笑
 ひよく嘆きよく泣きよく叫びよく唱ふ而して
 手の用をなまハ最も多し

第十五課 一人の齡の論

人生れて初年と嬰孩といひ能く歩よく
 話言よくと小兒といひひよく顧よく料簡
 何をもよく成人の時と一力衰へ手足弱
 きに至りてハ則ち之と老

年とつふなり

第三篇 飲食の論

第十六課 肉食の論

身と康健を保たんとハ飲
 食より第一なれ人の食物に
 宜しきもの甚だ多し中に就
 て獸肉と最も一とを牛子
 牛羊子羊豚の肉と第一と
 鹿山羊兔等の肉も亦と食ふ
 べし又た肉ハ煎じて羹汁と



りなすべし

第十七課 其二

鳥類と魚類も亦食もべきもの多くて本邦
魚と食もると最も多し水土地勢のまじり
むるやえあるべし鳥類の中にては鶏家鴨七面
鳥鴟雉山雞鶩鶩の類其外尚多し水族のテマに
てハ鯛鰈松魚鯖比良目鯉鮎鰻鮭鱒等も食ふ
べし介類にてハ蟹蝦蛤蜊蠔蜆等も又龜龍の肉
も食ふべし

第十八課 野菜の論

蔬菜も亦食となすべし其葉と食するもの
り葉の如き是なり其莖と食するもの 路獨
活の如き是なり其根と食するもの 大根芋薯
蕪蓮根烏芋芋旁の如き是なり其子と食するも
のハ昔の類是なり其葉と食するものハ瓜の類
是なり又其蕾と食するものハ花菜の類是なり

第十九課 穀物の論

穀類の食も供ふる者亦多し米麥牟麥粟等ハ
其最なる者なり米ハ本邦勝きてよく出来日々
の食ともするものなり諸穀とも皆を挽きて煮

とたし其細なる所と篩ひ取りて糕餅蒸餅點心
と作り其粗き皮ハ家畜と養ふに用ふる昔より豆
腐と作り麥と菽とて豉醬と作るも殊に夥し
と

第二十課 菓物の論

食ふべき菓類甚だ多し橘柑梅柿桃李梨林檎等
よしハ粒々として味をなすものハ葡萄覆盆子の類
是なり肉の内ハ核あるものを梅桃の類なり
の内ハ肉と藏し置くものを杏仁銀杏胡桃栗の如
きなり人の臍に乾し貯ふるものを梅無花果菓葡

萄栗柑等の類なり梅橙大柑橘梨柿を殊に有用
の菓にして諸方は多く貯るものあり

第二十一課 味と調ふる品と論

食物のうちハ淡きものハ塩と以て味を調へ又
砂糖蜜糖蜜と以て甜きものあり或ハ酢醬薑芥
粉胡椒等と用ひて物の味を調ふるものあり肉豉
葱丁子荳蔻花山椒肉桂胡椒等ハ名づけし香料
とす多しハ熱地の國より來るなり

第二十二課 食の論

人の食となすハ飢を救ひ身と養ふ為なり其始

の病にて弱し然る後之と吞むされしり胃に入
りて漸く消化し其津汁を血となりて以て生を
養ひ全身の力と加ふるなり食物ハ生れて食ふ
しりも煮て食ふを更に益と為るものと知れ
且つ食ハ足らざる小しり過て飽ハ且き所は
うに

第二十二課 飲もの論

飲もの論
飲ものを以て渴をさしむ飲べきものは水
茶乳カ非酒麥酒葡萄酒林檎酒梨子酒其外諸
の酒の類よりいその至つて好まものハ多し水

の茶加非ハ其次あり乳ハ牛の乳と羊乳の類
に其味しなると宜しく極めて人の養とな
る米麥葡萄酒林檎梨子等の酒を皆よく人と酔ハ
しむ都て焼酎の類ハ酔て人と害まるとのなり

第二十四課 農夫の論

農を四民の一として人の食まるとの多くハ農
の作り出を所なり毎日食まるとの穀類ハ
其種植たる所より之と獲れ進よハ田
地と犁して土塊を肥し糞を入れて種と播く等
の事と勤めて其間の勞苦ハ勿論種々の巧と尽

一若干の費とらりて培養を
 せよ其功を成すものな
 りけき大に農業を為すもの
 ハ多く傭くと雇ふ既に収め
 取りて穀物となれば之と市
 に出して賣るなり

第二十五課 其二

農家又左牲口と畜ふ馬ハ犁
 耙と挽き重荷と負ひ車と拖
 く為なり牡牛も亦挽負の事



よつうふも阿れど多くハ羊豚杯と同様は賣
 物とさるなり北牛ハ乳と取ら其乳にて白牛酪
 と干牛酪とを製まべ一雞鶩の類を卵ととり又
 料理して食まゝる為あり

第二十六課 食物と備辨するもの論

食物を固より百姓は由て出来たりものなれど
 も百姓より直に得るものも又必ず食物と
 備辨するものの手と経ざるものもを拵屋あり
 て米と煮上げ水車屋有りて粉と造り蒸餅屋あ
 りて蒸餅とつらり素麺屋有りて麵類とつらり

屠戸ハ肉類と賣り乳屋ハ乳と絞りて之と賣り
八百屋ハ蔬菜と賣り捌き酒造を我等の爲に酒
類と備ふ

第二十七課 其二

食物と備辨するものを多く力と勞して營むるにせ
くなり米屋の米と搗き酒屋の酒と醸し水車屋
の粉と挽く等の如し其外賣出に買取等は奔走
するものも必なるべし雜貨諸物と轉賣する問
屋の米茶砂糖菓物香料等と賣捌くものも又食
物よりして速邦に出づるものも必なるべし

今様なる物ハ舟車の運漕とたのみ若干の危峻
勞苦と歴く始てよく人々の飲食に給まらざる
得るなり

第四篇 服飾の論

第二十八課 男人の服飾の論

人の身体ハ必も衣服と着く被もんとを要す冬
月も暖かなる物と服し夏天ハ輕袷と着る地方
の熱きところも麻と用ひ寒きところにて皮
草の服と被る男子の服ハ帽子帶下着上着長着
襦袢襟胴着腰袴股引脚半足袋靴長靴等の品々

衣類の論 一

片利時阿爾蘭魯西亞等

らう

第二十九課

婦人の服飾の論

婦人の服もそのハ被鬢紐袖廣手細襦袢腰袴
腰衣股引脚半足紐足袋等猶多くけり其飾ハ簪
耳環鳳冠腕環足環の類なり本邦にてハ男女と
も衣服の作り方畧相同ト西洋にてハ其殊なる
と甚

第三十課

衣服を用ふ品の論

衣服と製するの料多くハ絲麻羊毛皮革棉花と
用ふ棉ハ印土亞非利加亞墨利加と多く生ハ麻

ハ比利時阿爾蘭魯西亞等の
國ハ生を本邦にも綿麻と産
まると多し唯外國へ賣出ま
程より至らぬのみ羊毛を半
より剪取するは絲を本邦の
名産にて蚕の吐き出を
とろ近來發賣して外國へも
輸出するもの出たり右
の諸品を用ひて種々の織物
と作る



片利時阿爾蘭魯西亞等

らう

第三十二課

衣と製するく手の論

衣服と製するは遠より本より多くの人工と経
 たり今婦人の仕事は衣と製するは小布帛と用
 するも其布帛を蚕糸して練り又を綿花と摘
 りて練り成り機杼と以て織りたり裁縫する
 小のたりても又鉸剪懸針縫針等と用ふ其品
 の皆を夫々の職人の手小成るなり鞋匠の革と
 用ふるは獸皮先づ皮匠の手と経て毛と去り採
 て革と一草と一てききより始めて靴と用ふる
 と得るなり

第三十二課

身と潔くすべきの論

若し身の康健なると欲するなりは必ず常は身
 と潔くすべきあり不潔は病を生ずる本なり人
 はみな毎日浴して靴きたる海綿又ハ手拭と
 よく体と擦り肌着を体の蒸發氣と吸込むもの
 巾をまぎくしと取り換ふべし居室ハよく洒掃
 しと空氣と通をべし

第五篇 居所の論

第三十三課

房屋の論

人の居る所を穴あり天幕あり廬あり屋あり多

くハ昔屋ニ居るなり屋の小なりと舎とつひ高
く廣きものを邸第とつ小屋の内ち分ちて内室
外堂玄閣客廳書房厨所地窖等とつ小廊下梯等
つりて上下左右ニ相通き

第三十四課

屋と建る材木類の論

木石鍊化石瓦石板石灰鐵銅鉛硝子とて屋と構
へるの諸材なり木を樹林より出て石と石板を
石礦より出で鍊化石と瓦ハ粘土より造り銀鉛
杯ハ金礦より出で石灰ハもと石と燬き或ハ煤
殻を焼てつりて玻璃ハ硝子屋とて作るなり

第三十五課

人の業の論

ノの世ニ居るや互に身の勞と分ち合ふて彼此
相資ると常とて故小食物と作るもの有り衣服
と製するもの有り器械と造るものあり銅匠ハ
銅と以て燭臺燈籠子等とつり陶工ハ坭と以
て杯碗碟等の陶器とつり鍛冶ハ鋼鐵と以て
種々の刀剪とつくるの類は相須て互小生養
の用となまかり

第三十六課

屋と建つる小入用なる職業

の論

家屋と造るに用ゐる職業数々あり其習ふところ
の業各々同下りたればども皆相預り其
事となすもさるるをなす石匠匠ハ煉化石を以て牆
と作り石匠ハ石と集合せ木匠ハ屋根と構ひ床
と作り屋根師ハ板瓦を以て屋根と葺き張
物師ハ紙を以て張貼とす玻璃匠ハ硝子と窓
扇匠ハ紙の現匠ハ石灰を以て牆及び天井と塗り
油漆匠もさるるの木材匠は漆を塗る

第三十七課

家什を作る者の論

家内の什物も亦多くの職人の手にて作るなり

差物師ハ棹机椅子杖簞笥寫字檯等の物をつく
り假令屋ハ種々の鐵器をつくり錫匠ハ諸般の
錫器をつくり其外燭帳襦袢蓑疊帝羅壇等の
のふりくくるまてくも専ら其業を習ふものなり
て用と便もさるなり

第三十八課

受負人の論

家屋と建てる管築の事と受負人いづく承校まると
の受負人又ハ差配方といひ又棟梁といひ其
人よく石匠地木匠木匠及び諸匠の工匠と備ひ
集めて夫々の事業を都合し家屋と造立し居

任と全備せしむ

第六第 教育の論

第三十九課 學校の論

書と讀と字と寫ハ第一有用の術ナリ少年の時
 ハ尤も學ヒヤキ一は是故よくの父母たるは
 のハ兒女と育つるよ必を學校に送りて誦讀書
 寫等の事と習ハ一は學の道ハよく氣と附くる
 とよく強忍するとの二と貴ぶ故に弟子ハ必
 勉強と第一とを師匠ハ嚴かなるを
 小學生ハ百一は從順ハ一は之と習ふべし

第四十課 學問の論

學問と成さんとするは必骨を折るべし
 く書と讀まんとなすハ慢声にて度々温習を
 要とよく手と習ふは多く寫さず心と尽さず
 一は悟らんとする聞るところと讀ところの
 事ハ宜しく考へて疑を去り算數と學ハ書と
 よみ字と習ふよりも難し然れども甚だ用とな
 る多し必を習てねがなりぬ事なり此事遂に
 多きものと思ふべき程に力と尽き時一世に能
 せざる者ハなきあり

第四十一課 童子玩遊

學問の論

學校よりりて學問する者ハ
放學玩耍の時あるべし其
所てびら打毬捉山鷄秋千相
陀螺盲公捉啞姥猛獸取蛇子
跳躍放鳥等のこと都て害な
きの要遊なりバ身体と壯健
ふきべし勤むればしり遊ひ
も樂しけれ故に玩遊と樂ま



んと思ひて學問を務むべし
寒國にて冬天下るれば氷
の上より或ハ走り或は滑走
して遊ぶなり

第四十二課

女子の玩

女子の玩耍ハ童子と異なり
く執九子藏金雞剪公子執交
加數築毬打燕等の事にて相
ともり遊む甚だたの故



互に湊りて愉く遊び自今も樂しき同伴とも
嬉しむらひきなり

第七篇 乳養動物の論

第四十三課 動物諸類の論

呼吸をして動く者ハ皆動物なり其内次第は生
長して大きくなるもの多く又よく物と感ぜる
もの多しはも獸をよく走りてな四足と具へ毛
或ハ越へりて其身を蓋ふ鳥ハよく飛び毛と具
へて其体と蓋ふ魚ハ翅鱗と具へてよく水と游
ぐ爬虫を或ハ陸に居り或ハ水に居る蛙蟻龜鼈

の類あり小虫類を足六本例の類ハ足なき物な

第四十四課 乳養動物の論

凡そ初生するは乳を以て哺養ふもの此と
乳養動物と云ふ即ち人獸鯨江豚等のいふものの
皆是なり人ハ二手二足有り獼猴の類は手四
本小して足なり獸を多く四足より手ナリ象
ハ鼻の端を抜りて手の用とあそ

第四十五課 家畜の論

人の養ふ獸と名づけて家畜と云ふ中にも馬ハ

驚駭オドロキしつて倦ウツはく人の用とつとほり多く健牛ケンウ
 ハ勞力ロウリキてよくつとめ牝牛メウの用ハ甚シ多く綿羊ワタヒツ
 ちよく馴ナてヤヤしく犬イヌちよく家ウチと守モリり猫ネコハよ
 く氣キを捕トふ子馬ウマ子牛ウシ子羊ヒツ子犬イヌ子猫ネコの類ルイも亦モ
 少な玩耍オモシをもつものむ山羊ヤギ豚ブタ驢馬ロウバも亦モた家畜ケイキョクの
 内ウチなり

第四十六課 殘殺獸の論

余オレの動物ドウブツを殺コロしく食クふものよ殘殺獸サンシツジュとつよ多
 くハ野山ノヤマの店タナなる中ナカに獅シと最モトも強ツヨクしつと
 虎コと殘賊サンシツのものしつと豹ヒョウと猛烈マウリツきものしつと豺狼サイロウ

ハよく食クをむとむるものに
 と狐狸キツネハ狡猾クワツもの熊クマハ勢雄セウユウ
 彼カらの野猫ノネコハ兇暴クワウものなり
 此外物コノトモと殺コロしく食クふ獸ジュの属ルイ
 猶多ナラニし

第四十七課 野獸の論

野獸ノジュハ林下リンカ曠野クワンノ平原ヘイケン山嶺サンリョウの
 間マに棲スむなり其中ナカハ野猪ノイノハ
 果敢クワカンとの鹿シカハ雅オトシしきとのち
 り其外ソノトモ野牛ノウシハ猛殺マウシツもの斑驢ハンロウ



八 全身黑白の筋ありとの象ハ大ニあるとの馴
鹿を力つよくしよく事ニ耐へ長頸鹿ハ身の
丈高く且つ馴やかく羚羊の類を疾走するものな
り是等ハいなあくにハ希なるものあり共ニ
草菜と食ふの獸なり

第四十八課 其二

狸ハ辨莫と好むもの鬆鼠ハ快捷との山兔ハ臆
病のとの纏ハ最も小なり者老鼠ハ残害とな
海狸ハ慧し精ぶもの獺もくもく
よくくを笑ハ一む此等ハ草穀物木の實及

び草木の根葉をくふものなり獸の人の用と
なりハ或ハ之を食料となし或ハ衣服の用と充
て或を勞役小つらふなり

第四十九課 獸の身と覆ふ物の論

獸の其身ニ具へ衣ハ代へて体と蔽ふとの各々
同トらうとざるなり綿羊の毛ハ柔うしハ豚の
毛ハ針の如く牛馬駱駝鹿山羊の類ハ其毛ハ
髪の毛の如く田鼠猫狐狸鬆鼠貂等ハ其皮裘と
もく豪猪と猬とハ毛刺棘の針の如く馬獅子
牛の頭の毛長くして驥となま

第五十課

獸類各一異の論

猫鼠獅虎を多しを而鬚有り熊の足不る掌有り馬蹄
駝を分ては駱駝の背より高き峯の如き肉を
王孫増田鼠は長き喙有り牛羊鹿山羊は
角有り野猪は口旁に長き牙を出し象は長
き牙ありて亦拔あり

第五十一課

獸の所為と其の論

獸の敵と防ひて守るる所の所為ハ
各異なるものなり馬ハ踢り豹ハ咬み羊ハ額を
て抵り牛ハ角をて觸れ熊ハ抱へる等の如し其

声と發するも同トウを獅ハコウと吼ハ
豹をリンと吠き又ビヨウと嗥ハ猫をニヤアと
叫び悦ぶとき其声柔らうやんてゴロク
ハヒ獼猴ハキヤアとヒ馬ハヒンとヒ羊ハ
バアとヒ牛ハエウとヒ

第五十二課

獸の動き方の論

獸の動き方も亦各異なるものなり馬ハ行
或を驟り或を馳せ或ハ跑り犬ハ走り亦嗅て物
をきつね熊と獼猴とハ樹を攀躋り狼ハ跑り虎
ハ躍りて物を擒り山羊ハをなうよく跳ぶ

一 獸夜出て食を尋ぬる者ハ昼ハ多く深林巖
穴の間ニ藏る

第五十二課 獸の居處の論

鼠子、老鼠、狐狸、田鼠等の獸ハ地ハ穴を掘りて居
り、鹿、猪、野兔等ハ林中ハ草を踏きて卧、麋、鹿、獐
猴モ木の上下居り、海狸ハ河の旁岸ニおろ
て巢を在ると屋の如く、獸の臥る處と獸尊し

第五十四課 獸各習作の論

獸齒ひろくして鉤く大ひなるものハ菜草を食

齒の尖りたる者ハ余の物
を殺して食するあり、蟲と喰
ふ獸あり、菓と喰らふもの
象の身体ハ碩くして重
故に足も強く太くして之と
支へ、海豹も身の脇ハ蒸氣船
の外車の如きもの有りて、
水と遊ぎ、猫も足に爪と具
へ又足の裏ハ軟らなる胞
有りて行き歩む音となさ



各書如息の類

卷之二

二二

第五十五課 類と以て聚る獸の論
水牛綿羊ハ群と爲して游行且つ食と求め山羊
靈羊ハ高山に居り冬の比ハ幼鹿と鹿と相聚り
て其保護となし野猪ハ子とひきつきて其長大
あるを待て後ハ相離る牛ハ敵に攻らるる時を
羣となして互に相保り野豹も羣をわけて他の
物と獵り食ふ

第五十六課 人の爲に勞に服する獸の論
人のためにつゝそれて役に服する獸甚多し馬

を車と挽き重荷と負ひ亦人の騎るに使ふる
犬ハよく夜と守り牝牛も亦荷と負ひ田を耕し
駱駝ハ其性勤忍つゝは死に耐ふて熱き沙漠の中
に遠く重き荷を負ふて行き驢、馴鹿、象のおとさも
亦皆人の役とつとむる物なり

第五十七課 人の食となす獸の論
蹄甲二つは岐れて其性草菜を喰ふを常として喰
ふて後又草を翻して再び爵む獸假令ハ牛、綿羊、
山羊、鹿等の如きものハ其肉至つて人の食とな
すもよろし物熊、家兔、野兔の如きも亦其肉を食

各蒙和意の策 卷之一 二十

ふべし獸の子を都て其肉甚ど柔軟なり又之を食まると時もあり

第五十八課 其二

亞畢利加之土人を獼猴の肉を食ひ阿非利加人ハ象御犀虎河馬の肉を食ひ亞細亞歐羅巴の州内までも或ハ馬の肉を食ふ國も多し何れ地球北極の處にてハ土人好んで鯨膏及び海豹の肉を食ふ

第五十九課 人の衣服に供する獸の論

綿羊の毛ハ靴下維也羅紗と織り獸トよりて其

皮と裘となりて上着帽及び手套等の物を作す
べきものも多し山羊のとき獸ハ其毛長し織て
谷般の衣裳とつるべし獸の皮ハ其毛と刷去
り革となり鞋と成るべし海狸兔の毛皮を高
帽とつるべし

第六十課 獸の雜用と給する論

象と海馬との牙を多く人の用となし諸般の玩
器を作り錠匠諸獸の大骨を以て鋸著等を作り
獸の角ハ諸々の器に用ひ馬の毛ハ織て褥蓋と
なり鯨魚海豹の油は燈に用ふる油と製し獸の

角と甲との骨ハ膠となし其膏ハ蠟燭と製きべ

第八篇 鳥の論

第六十一課 鳥の總論

凡そ生物の蛋より出るとの卵生の動物と名
づく鳥小虫等の類皆然り鳥は嘴羽翼尾足あり
趾は爪あり喉の下に膀胱あり鳥類の中は頭
は冠と具まるとの有り鬃髻と具まると者有り地
は行とのあり樹を攀るとの有り枝は棲むもの
あり水を游ぐものあり

第六十二課

鳥の類と具ふる論

鴟鵂鷹鷂の類は生物と捕へ
食ふ啄木鳥鸚鵡はよく木を
攀ぐれども地を行は便なり
を鶏の類をよく行き走れ
も高く飛ぶと何となくを
と鴝鵒は走事甚と速
なり長き脚の鳥は多く水澤
と涉り掌は足の鳥はよく



鳥の類と具ふる論 第六十二課 鳥の總論 第八篇 鳥の論

水と遊ぶなり

第六十三課

鳥の性と異なる論

鳥鴉と羣とあり巢と構へて同居一鷺鳥雀の類ハ嘴啄硬く交喙雀ハ松の實と扱て食ひ燕子ハよく蟲と食ひ啄木鳥ハ啄て木の皮と敲き蟲の類と驚めしく搜し食ひ鴟鳥ハ夜と待て出て物と捕へ杜鵑ハ他の鳥の巢に己ガ卵とろし棄るなり

第六十四課

其二

駝鳥ハ走ると馬の跑るが如く水と涉る鳥ハ頭

長く鵝鵝ハ蛇と捕へ海鷗ハ

海鳥の至る大なるもの神鷹

を飛と甚と疾く彈鷓鳥を走

るもと激くも共に難く

て飛ぶとと得手と一企鵝を

翼小ホして行くに難く遊ぶ

と得手とき

第六十五課

鳥の羽の論

鳥の羽ハ長短大小種とホ



鳥の時に隨て地を移る論

第六十八課 鳥の時に隨て地を移る論

時は隨て地を易へ居どころを移る鳥は燕杜
鵲の如きは春天此地不到りて秋は暖邦は往
き冬は寒きて又來る鴻鴈鴨の如きは秋此
地に到り冬と凌ぎ春の暖なる不臨きて又寒
邦とゆく地を易ふる為は往來するはつねり
大海大地を通りまぐるなり

第六十九課 鳥の人に用ひる論

鳥の肉は食ふべきもの甚ど多く鷄家鴨鵝山鳥
雉鳩山麻雀等ハ食物に至るは家鴨鵝鴨の如

毛と羽ハ牀蓐の内まゝさへく鶴の羽の大なる
ものを其管を削りて西洋より筆となす若し
細字を写さ或ハ繪を畫く小を老鴉の羽管を用
ふ

第九篇 爬虫と魚との論

第七十課 爬虫の論

爬虫も魚と同じく其血紅く冷なり鳥獸
と同じく歩都く爬虫を山陸にも水にも居る
その出来たるの多し其内脚のなきを蟻蟻
蛭魚龍等の如きものなり脚なくして腹行を

答景口惠の撰 卷之二 二一七

もろもろのハ諸蛇の類なり蛇の中ハ毒の多し
の必なるト云

第七十一課

爬虫各異なる處り論

爬虫は其皮の光滑なるもの有り甲を以て身を
蓋ふもの有り其甲を堅固あると推のくよく
外を防ぎ内を守り中にも亀の甲を甚く硬く海
亀は眠喟と名うるもの有り甲麗しくしく梳
等の品を作るべし又脚魚と名うるもの有り其
肉甚く味有り蜆場ハ多く性質良きものにて害
をなすこと少く其温るなる雨の多し後

多く出づ

第七十二課 魚類の論

魚ハ海河溪湖に處るなり身
の皮光滑なるもの有り鱗ハ
以て其身を蔽ふもの有り其
骨ハ軟くしく色白く魚ハ
皆卵を生きて一魚の卵を生
むると其数毎に数十より至
るべし其卵と魚子とつゝ或
は海中或は河中或は泥中



各書知恵の環 卷之一

何れよく魚と成る魚類を声あきとめなり

第七十三課 人の食となる魚類の論

海魚も魚ともは食用と成るも海魚にて人
多く食するものハ鯛方頭魚鰓鱸鰓鯖松魚華
鱒魚鱒魚等あり河魚ハイモ鯉鯽鱒鱒鮭香魚等
なり魚類の中よおめて鯊ハ至つて食と食も
のありと世頭魚鰓沙魚など其うち小て甚しき
ものなり

第十篇 蟲類 蠅類の論

第七十四課 蟲の論

蟲を六足あり只蜘蛛と蠅とハ八足なり蟲の身
ハ頭胸腹の三段に分つ尾に針を持つものあり
蜂蜜蜂木蜂の類是なり蟲の平生は何るものを
蟬蝶燈蛾甲虫蛾蜂蜜蜂蠹魚螢蚊等なり

第七十五課 蟲の成りと變へる論

蟲を其成りと教度變へるものなり殊に三次を
るもの多しと初めハ小卵の中より其卵
變へてハツの蠅となり既ハ大な水バ身漸く
縮まり硬く變へて蛹となり其後蛹裂て翼あり
蟲と成り卵を生じて死するなり

第七十六課 蟲の用ある論

蟲の用あると甚ど多し蜂ハよく蜜と醃し蠟と結ハ蠶ハよく絲を吐き呀爛虫ハ呀爛米とつもの画の具を結び画に漆の用をあき五倍子の亦蟲の結ふものよし墨水を作と皂色と漆は紫鉛蟲を脂と結ハて膠の如く封蠟と作るべし

第七十七課 蛭類貝類の論

此類の物を皆其身質柔軟にして或ハ肉にて數筒の環と為し相比合せし身となり或ハ外は貝殼と具へて骨の代とも蛭と蛭とハ肉の環と合

せて身となし蝸牛と牡蠣とハ外は殼を具ふものなり此軟質の生物ハ陸に居ると水に居るとの別有り蝸牛等の如きを陸に居り牡蠣類の如きを水に住むなり

第七十八課 蛭類貝類の用ある論

蛭類ハ上地を穿ら行きて上と鬆し又魚を釣るの餌ともなり水蛭ハ醫者の用に入りて血を吸ひ墨魚ハ黒き汁を生じ其汁を用ひて墨粉を作ると蛭殼ハ真珠を生じ石決明とてハ鏡を作たり又青貝細工を用ふべし

啓蒙知恵の環巻の二

啓蒙知恵の環巻の二

啓蒙知恵の環巻の二

放菴子

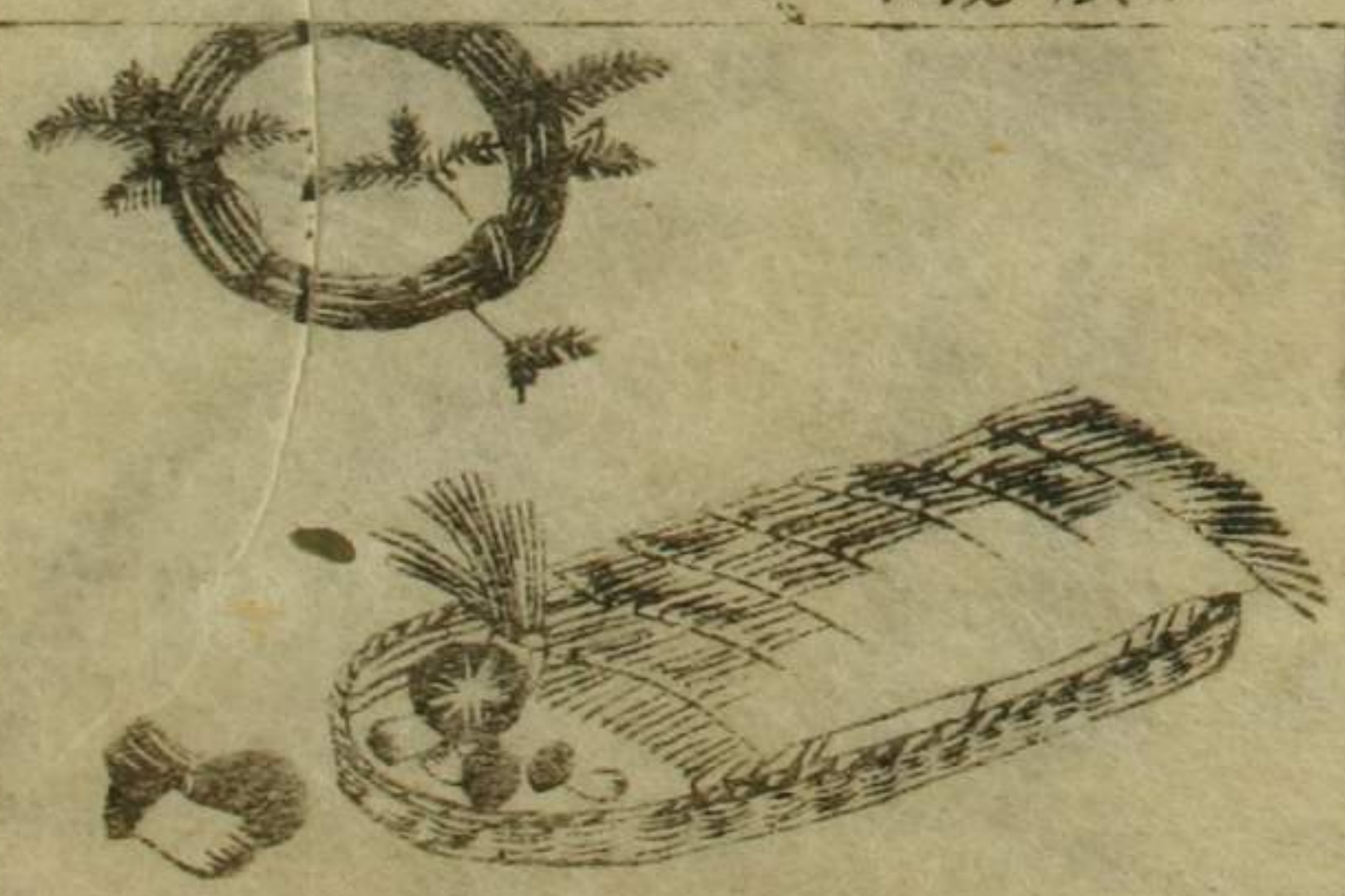
譚述

第十一篇 植物論

第七十九課 植物の類

と分つ論

植物とハ真木、灌木、草、菜、鳳尾、
苔、耳蕈の類、なす、蕈類、ハ地面
及び朽木の上、小生、耳類、ハ
樹と石の上、又生、ト苔の類、ハ
林の中、と古き壁、又生、ト草の



啓蒙知恵の環巻の二

類ハ田野ノ生ト鳳尾類ハ多
 く日陰ノ處ニ生ト菜ト花ト
 ハ園畑ニ生ト真木ノ灌木ハ林
 生ト又求メて栽ツくル也
 何リ

第八十課

真木灌木の論

真木モ灌木モ幹枝根トとシ小
 同トく木質ナリ然ルに
 其類ヲ分ツるモ真木ハ其



枝ヲ幹トより發シ灌木モ矮クて叢生シ枝ハ根
 より發スる故ナリ園畑ニ生スる木ハ山林ニ
 生スる木ハり求メて家屋ノ點綴景色ノ夫レ先ニ
 栽シ附スるもの何リ或ハ之ノ葉ヲ摘取ス為シ栽シ附
 者ハ何リ材木ノ用ニ植附スるもの何リ

第八十一課

林木の論

林木ノ用ニ立處其廉甚多一松杉等ノ樹ハ房屋
 構ヘ櫺ノ樹モ船ト造り楡ノ樹ハ用ヒて汲水
 筒水車等ノ器ト作り榛ノ木ハ匠器ノ柄トなを
 べく山毛櫟ハ木椀ト作るべく胡桃ノ樹ハ小銃

の臺に宜しく菩提樹を雕工り宜しく字と雕り
畫を刻するよる櫻梨棗を宜しくとせ

第八十二課 穀と結ぶ草の論

草類のくよ用あるものを穀と結ぶの類は如く
ハナシ或ハ粒のまゝ食し或ハ磨粉となし食
ハ俱に生と養ふべし其禾ハ高く地上より出で生
ま其中畑は生むるもの有り水田は生むるもの
有り世界中之を生むる所少なうを五穀ハ其
穂の中より時ハ糠有りて被包たり

第八十三課 野菜の論

園圃小を多く野菜と云ふは多くの食に用ふべ
し其の最も平常のものハ芋類諸薯菜蘿蔔紅蘿
菊蕪菁甜菜葱花菜莧菜龍鬚菜等なり其生のもの
列物ハ陪ふものハ苺菜芥蒿苳早芥等用ひて亦
ひと調ふものハ薄荷茴片紫撫荷萬等なり園圃
の中は瓜と瓜の類とも種々なり

第八十四課 薬に入る植物の論

薬に入るべき植物甚多し其根を取る者ハ大
黄甘草等のごとく其花と取るものハ甘菊玫瑰
などの如し其皮と取るものハ幾那附桂等の如

く其汁と取るものハ阿芙蓉などの如く倍又其
葉と取るものハ枇杷紫蘇の如く其仁と取るもの
のも桃杏の如く其核と取るものハ栗桂枝等の
おとし諸藥品と名を採るく何れも其代
採りよく製法して然る後藥肆に售るなり

第八十五課 植花の論

園中ニ植附る花ハ梅櫻薔薇花夜合花向日葵菊
茶山花杜鵑海棠夾竹桃茉莉指甲牡丹芍藥の類
其他種類甚ど多し縷々述べらるは一年つと
て枯るもの草木とて一ひ歷年常は茂るもの

木本として

第八十六課

鳥居草類の論

鳥居の類も食ふべきものあり
類ハ何の如く占壁
樹木之類ハ何の如く占壁
ふべきものあり甲上漆上と
かたはささぎの如く食ふべき



き者か何り草類ハ排草松茸などの類ニて其中
食ふべきもの何り又毒コトケ食らばハコトケ
さもの何り

第八十七課

植物の用論

前ノ言ハ何の穀類野菜の外更ニ食物何り多く
植物何り出ヅ茶加非各般ノ香料其外糖藕粉西
國米葛粉是なり又南海の島ヨリ蒸餅菓ナ
よもの何り其木ハ屋ト作リミク其皮ハ布ト織
ミク其葉ハ人の糞トナリミク其葉ハ布ト織
云々

第八十八課

其二

椰子其肉内ニ水何り清涼ヨリて味ヨリ其殼
ハ杯楡ト云々其衣ハ蓆トナリ繩トナリ蓆
トナミミク其肉ヲ食フベク其油ハ燈トナリ椰樹
生長の地ハ富者ノ大厦モ貧人の小廬モ皆椰
木を用ひて造リ其葉ハ編ミ織リ屋根の葺料ト
ナミミ

第八十九課

植物の異なる處の論

草木の根幹等の處彼ト此ト同ト何らある
其根の長ハ一ト尖トモの何ラ密ヨリて長類の如

きしもの何れ其幹或ハ實したる何れ空虚なる何
 王或ハ心蓮何れ何れ節接何れ何れ其葉も形状
 一なるを團きその何れ多く角何れもの何れ滑
 澤なるもの何れ粗刺ものあり芳香きもの何れ
 其花の形色香も各々同トからまし其子も或
 ハ肉内ニ藏ま或ハ殻ニ覆れ或を焚く交むもの
 何れ或ハ棟ニ包むもの何れ

第九十課 植物の生長論

草木の生長ハ汁氣の養ふより致す所なり其根
 の最小なるもの草木の根と云ふ土中に入て

汁氣を吸ひ其汁を幹に送り
 枝葉に分ちて一身の中ニ微
 小なる養ひを得ざる處存
 在す其種を播き或ハ其根
 を分ち或ハ其枝棟を折て栽
 挿とまるとなり

第十二篇 地の論

第九十一課

地面形を分つ論



文
 卷之二

地球の形は乃ち圓一故に之を地球と名づく其全
面を土と水より成る平地山嶽谷島等なる土
の部あり洋海河湖なる水の分なり地上は許
多の邦國あり其國々よ市街村田畑園庭金銀石
礦路林澤郊野等あり

第九十二課 地球の形を分つ論

地の平々にして高うり或四方八面廣潤たる
處を平地といひ平地の上より突起高き
えたるものを山嶽といひ山の頂は火を發し
ものと火山といひ両山の間地卑くして空洞を

るものを谷といひ陸上にして週圍に水あり
のを島といふ山より洞窟と巖窟といひ地
のものを上窟といふ

第九十三課 水涯の論

水の大は匯て以て地の大洲と分ち隔つる
のを洋といひ海といふ水の分水流きて洋と海
に注ぐものを河といふ水を中央にして週に土
を繞るものを湖といふ地下に水あり其湧出
の處を泉といふ泉の處に於てく毎に井を掘
なり平地にして低く濕りる處を澤といふ

第九十四課 水の變り論

水凝りハ氷となり地球の南北兩氷海に於てハ
その氷高く突上りて常に山の如く日の熱にて
水と蒸る水變りて水蒸氣となり水蒸氣外に雲
を成り雲結んで雨となり水と煮て熱極れば變
りて蒸氣となりあり海の水は鹹し人飲まざり
たえず飲べき水ハ色なく臭なく味もなきを宜
し

第九十五課 地の質の論

地の質ハ七類塩類金屬礦屬とて成りなり上

類一なりハ水けり礫けり石

灰あり粘土けり方是なり

砂あり海邊は多く或ハ砂坑

けり礫ハ礫坑ハけり塩ハ多

く海より取り又塩坑より採

取る金銀銅鐵鉛錫及び石炭

硫黄等々各地の財貨を為す

ものにて各地の内より掘出

るなり

第九十六課



土類塩類の論

百煉石ハ用ひて玻璃を作り紅埴ハ用ひて煉化
石と丸を作り白土ハ碗碟其外諸般の磁器を作
リ大理石ハ烟筒の額を作り朽石とつふそのハ
金類を磨くに用ひ石灰石ハ画工ハ入用のモ
のハワリ縁礬明礬ハ漆工に用ひ硝石ハ火薬を
造る

第九十七課 金屬の論

くの平常用ふる金類ハ金銀銅鐵錫鉛亜鉛及ひ
水銀ナリ金銀ハ稱寶金と云ふ鉄を生るるニ

とナリ銅鐵錫鉛亜鉛ハ産むる處と多くて用
る處も亦多し鉄を剛く鉛ハ柔し汞ハ乃ち流動
ハ金銀と銅とハこな鑄て錢となし以て商法の
便利と云ふなり

第九十八課 燃ゆべき礦属の論

金屬の外ニ更ニ火の燃つく礦属有り亦礦山ニ
り堀取るなり硫黄石炭の如し硫黄ハ色黄なり
焼ときハその烟リ人をしりて噎しむ石炭ハ色黒
燃しそ薪ニ充べし其類数様有り石性石炭木
性石炭山石炭光石炭等是なり又石より出る油

あり 瀝青の類にして石腦油の如き是なり

第九十九課 金類の用をなす論

鐵ハ各般の器を作すべし或ハ重大なる器に用
ひ或ハ双物の用に使ふ錫を以て薄き鐵片を鋪
き蓋ハ即ち白きブレッキとなす之を以て又
箱燭臺等を作すべし金銀ハ錢を鑄又飾となす
べし鉛ハ長き水筒及び水溜を作り又屋背の水
槽を作すべし銅と亞鉛とを合まれば即ち真鍮
を作すべし

第一百課 寶石の論

石の貴くして幾つもの玉とつゝ其類甚
多し碧玉青玉蒼玉綠玉紫玉葱石瑪瑙猫兒眼
翡翠玉等あり金剛石ハ色なく透明りて寶石の
至て貴きものなり

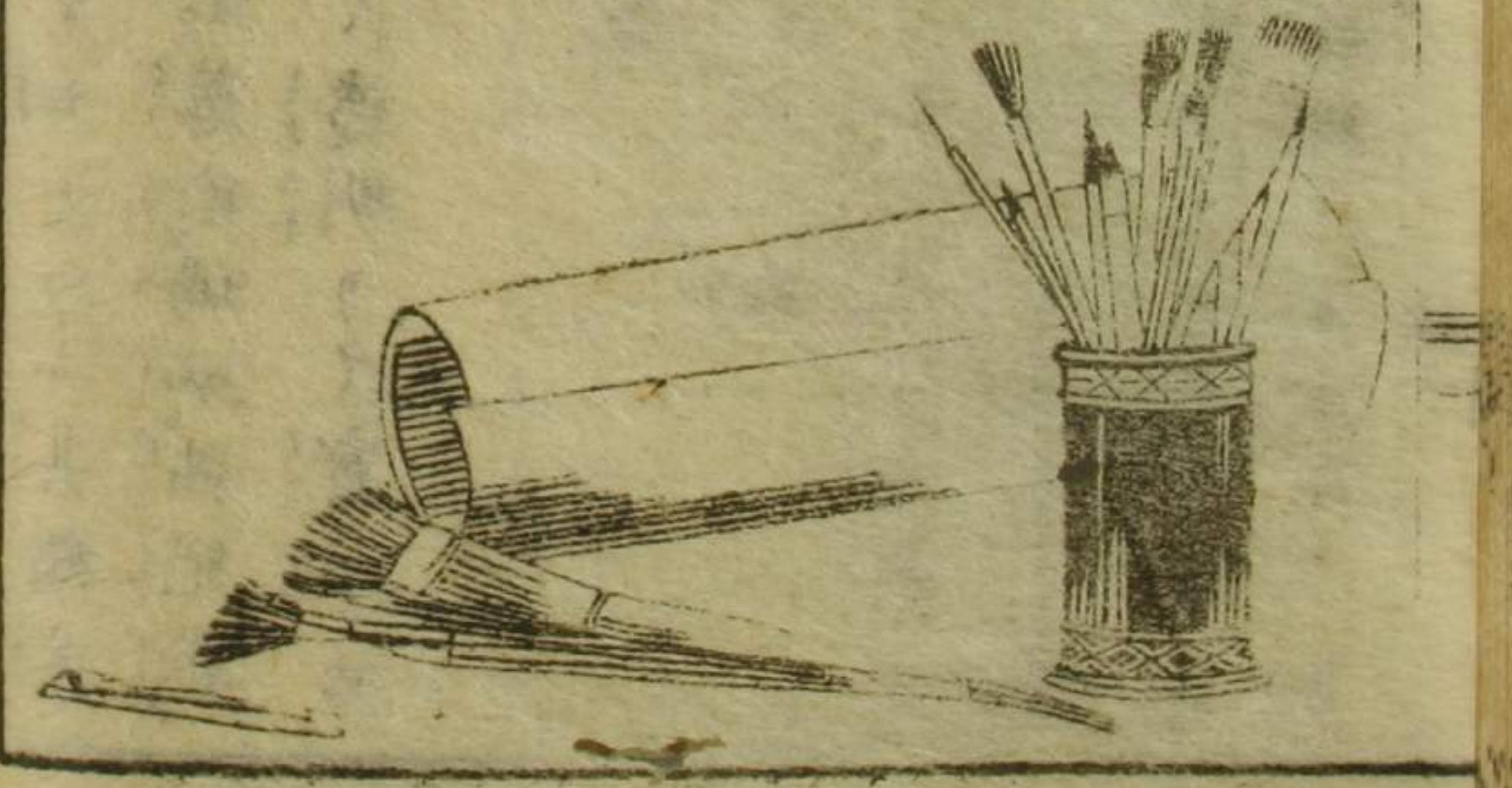
第十三篇 物の體質の論

第一百課 諸物三類を分つ論

世間日用の物其由て來る所を動物植物礦属の
三類なり天下第一品も此三類の中より出づる物
ハ皆假令ハ此筆にて言はん其の先ハ毛を
以て作すなきハその質乃ち動物のるゆかり其

竹なと其
 柄ハ木々まぐハ竹なと其
 質乃ち植物の類より出
 此紙ハ木々もハ麻棉を
 以て造る處即ち植物の類
 属を此小刀の柄ハ乃ち象牙
 なり然きハ則ち其の貨ハ動
 物の類より出て其又ハ鋼な
 是を即ち鐵属の類ニ属ま
 可去と

第百二課



輸入品の動物質ニ属するもの
 此論

物の外邦より舶米、木炭、
 品とり本邦を以て言ハ、輸入品の動物質
 象牙、草、蠟、獨、海馬、牙、鯨皮、牛酪、其外毛織の類なり
 第百三課 輸入品植物に属するものニ論
 輸入品の植物ニ属するものニ亦ハ、藤、砂
 糖、加非、落花生、木棉、莫大、小類、紙類、米、麥、諸藥品、
 草木、紫、檀、蘇木、更紗、金巾、唐棧、書籍、酒類等なり

第百四課

輸入品に樹脂のり論

樹木の脂を輸へるもの亦多し亞刺伯脂ハ
一種の銷塞花樹より出く乳香沒藥及び乳香ハ
薬に入るべく抹紙膠及び新洲樹膠ハ水濕を防
ぐべく其他の用も亦多し

第百五課

輸入品に植物の根と油のり論

草木の根及び其産出の宜しきものハ其用あり
茲以て又舶来ものなり 參大黃當歸龍胆等の
根々用いて藥となし 坭苜根ハ香と草木の油

を出せり亦少くは攪ハ攪油を出し 革麻子

ハ革麻油を出し 丁子ハ丁子油を出せ

第百六課 礦産の論

諸礦の中多く物は製して其原の質と同トあり
ざるやうになるものあり 譬ハ銅鐵鉛亜鉛等の
如きものも本ハ其方礦中より出て其礦を視ま
を只石に似たる物の多き尋常日用の器も鐵鑛
より出萬民必を需むる所の錢も金銀銅鑛より
出来たる處なり

第百七課

人の花費する所の物の論

人の毎かむらじ葉る品そのに又用は立つべき
その何の木削屑鋸屑紙の裁屑のゴミも貨物
を詰めて荷作りも摺視旁塞は用ふべく舊き
毛氈襦袢も拵碎て再び粗布を織るべく棉布麻
布の破爛たるものも搗て漿となし紙を造るべ
く玻璃の碎ハ玻璃匠に歸し再び鎔し又硝子
を作さるべし

第百八課 賤値あるもの論

賤値あるものも用をなさしヤミヤミ常の粉土小
て紐手を造れば之を視るに寶石の如く織局の

葉る羊の毛碎みて林褥を作さるべし縫工の裁屑
ハ樹の枝を束ねて櫛よくよく秋の天の落
葉ハ掃集めて貧乏人の林褥となさるべし

第百九課 物として用何とせざるをなき論

物として用何とせざるハな故に物として一も
棄べきものあり獸骨の大なる者ハ刀叉の柄と
なまべく小なるものハ搗碎きて粉として糞料と
あす登る樹の枯枝ハ甚ど薪となさるべし
橡の子ハ用ひて豕に喂むべく獸の皮角蹄の
骨も亦膠を製まべし

第十四篇 空氣諸天の論

第一百課

宇宙及び地球の論

昔の人は地を扁平なるもの
と思つて去なげし其實は大
なる圓き珠にて土と水とを
以て成る者なり又日ハ地を
西て東より西小至ると思へ
其實ハ一日を繞りて地球
ハ其日を繞りて行毎年一週を



るなりけれ遠く天に見ゆ星は多くなる太陽た
るを疑ひなす太陽ハ日のこゝなり又各を
偶々多行星ありて之を環繞て息まざるあや
地球水星金星等の吾ハ日を繞り如しと言ふ

第一百一課 極の論

今我々の指を巨指と食指とに把り以て之を地
球とせしむハ食指と上とあり大指を北極と巨
指を南極と以て極の蒂底とも云畧扁より好
地の真形は似たり蓋し地を圓き球とるなる
のへども極の處ハ微く平なるなり二極

を名づけて地軸の端とす

第百十二課

地の運動論

地球ハ軸を機として自ら旋
こと毎日一度又別は週年
日を運ぶこと一度なりその
みづらう軸轉もる由半
球片一遊びは換りて日に向
ふ日は向ふ處ハ光を承て明
ふ日は背く處ハ光なく



て暗し明なる時を晝と暗き時を夜とす其日
を運ぶ由て其位置時々に變り兩極更々代り
て日小向ふ此由て四季を成まなり

第百十三課

二分二至の論

春の季一日何り秋の季一日何り天下の
晝夜平分ふし各々十二時なり此二日を春分
秋分とす夏の季一日何り晝週年の日より
長し冬の季一日何り晝週年の日より短し此
二日を夏至冬至とす

第百十四課

月の論

又此口息の巻

卷之二

十五

月ハ地球ニ隨テ相與ニ日ヲ繞リ又シヅク地球
を繞テ行ナリ穹蒼の中月の兼麗ハ如クこのな
く年中多くハ夜ハ何モアズクその光ハ浩々月
の形ハ常ニ變モ其地を繞ルハ大約二十九日ハ
一週モスナリ年を以テ月に分ツハ之ヲ為
ス

第百十五課 空氣の論

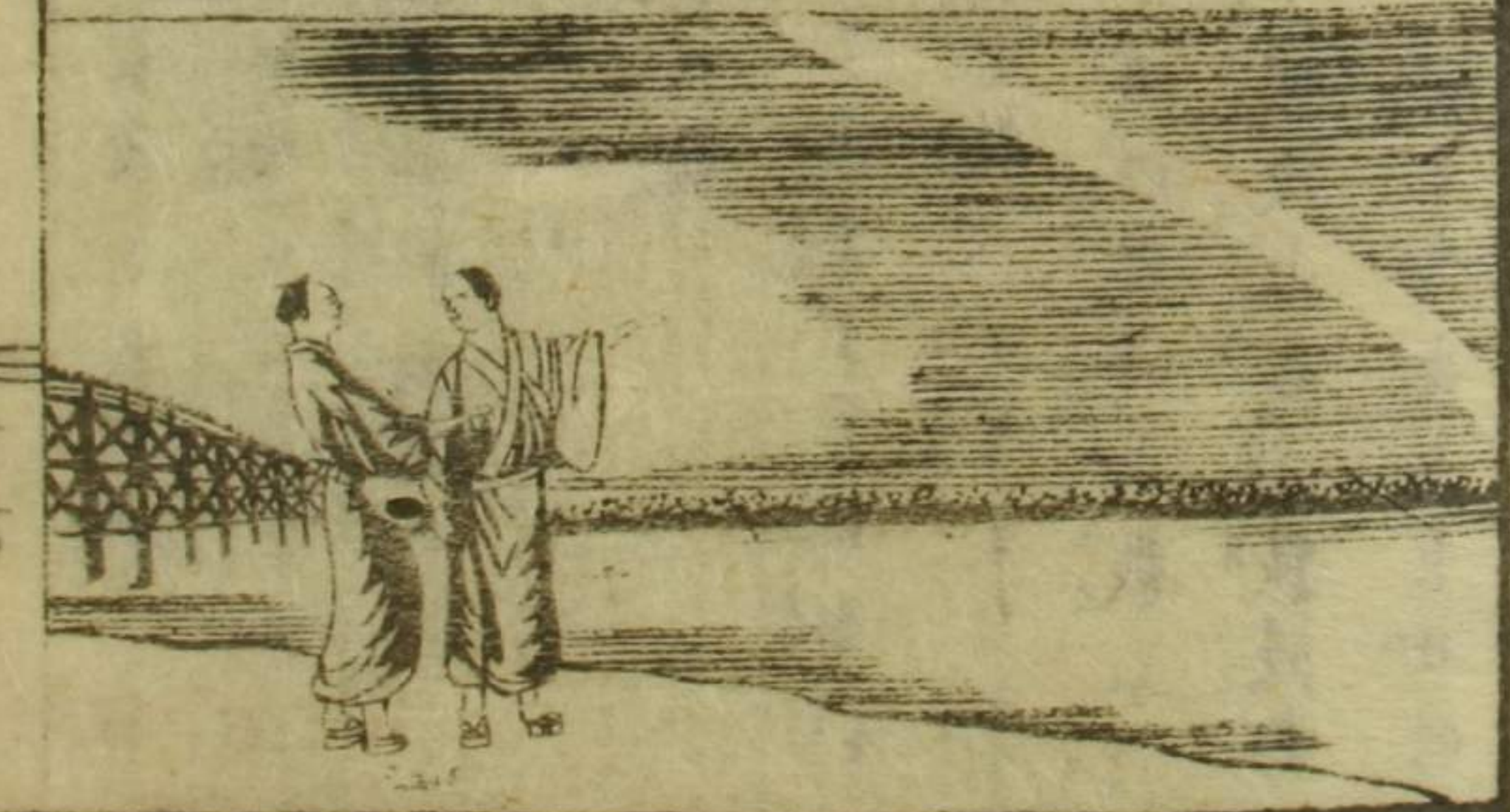
地球ハ氣の内ニ包まれ人の身ハ氣ニ觸れ又之
を呼吸モ氣の速ニ動モ風といひ風の旋轉テ吹
クを旋風といフ霧ハ地ヨリ騰リテ雲をなシ雲

氣の凝結リテ地ニ降ルを雨
とフ

第百十六課

氣中の景象論

氣中ハ明物有りテ或ハ浮うひ
或ハ流なま候まち見み忽たちち消きス
もの之を景象とフ雨あめふる
時とき日ひの對天たいてんニ有ありテ雨あめ點てん
ニ照あり輝あくを虹にじとフ月つきの
照あハ今いまもものを月虹げきとフ



雲氣日月を圍ふ抱へて累となまとの残暈といふ閃電ハまなまら電氣の雲の中よりもき出たりなり雲もまきとおのづから景象の一なり

第十五篇 時節の論

第百十七課 日を分つ論

毎日比晝夜ハ二十四時より夜半より正午に至る十二時これを午前幾時と数へ正午より中夜に至る又十二時これを午後幾時と数ふ一日の間は早朝上午正午下午晚夜中夜の數候あり日の出るを晝とふ日の入るを夜とせ日の

出んとするを黎明とせ日の入るを黄昏とせ

ツ

第百十八課 月と季との論

十二月を一年とし昔の大陰曆よりハ一は年の内に七の閏月あれども今の太陽曆ハ四年の内は只一日の閏ありのみ又月に大小の別あり大ハ三十一日小ハ三十日あり月と閏との歌あり其歌は言ふ

一三五七八十や十二月日數三十一日と知れ

二月の廿八日、四六九十月、月八日、数三十
閏年の四年、一度おのまゝハ二月のホ
一日を増す

毎月各々名跡、何りて之を別つ一年を春夏秋冬
の四季に分ち、一季各三月づゝ、小く三四五月を
春と一六七八月を夏と一九十十月を秋と一
十一月を冬とをさるあり

第百十九課 月と旬との論

十日を一句と一月上中下の三旬何り又七日
毎を週とさし之を日曜月曜火曜水曜木曜金

曜土曜日と名づく

第百二十課 甲子と百年との論

吾世歴ハ古来甲子を用ひし年を記し六十年を
一甲子とせし明治六年より

神武天皇の元年辛酉を紀元とし百年を以て年
を数ふ即今年明治七年ハ紀元二千五百三十四
年なるあり西洋ハ其教主の生れし年を第
一年とし今年に至り千八百七十四年あり

第十六篇 地球寒暑道を分つ等の論

第百二十一課 四方の論

存家如思の理 卷之二
 人も正午の時におるや日
 不向つて立つ時ハ前ハ南不
 背ハ北不をハ東右ハ西なり
 地球の圖而ハ對して之
 を見ハ上ハ北よて下ハ南左
 ハ西よ右ハ東あり東西南北
 方位を四方と謂なり

第百二十二課

赤道及び五帯の論

南北二極の真中地球の最も



大なり屬小なり、地球に線を引て環繞ふと
 のを名づけて赤道と云ふ又圖面を五帯に分ち
 て一を熱帯と云ふ赤道の両日さなり二三を温
 帯と云ひ又正帯と云ふ四五を寒帯と云ふ南
 極北極の處なり熱帯寒帯の間ハ即ち兩温帯の
 所なり

第百二十三課

熱帯の論

地球機の中央を闊き帯一條を以て東より西
 直り包りて其面積三分の一を蓋ふゆらにさ
 さまハ冷も之を熱帯北擬へ得べきなり云の

熱帯の動物の至つて大ひなるもの至つて器
しきもの又至つて兎きもの等多し一射熱帯の
地ハ人の用を以て動物固より多し一へも
又猛獸惡鳥毒蛇螫蟲等の淵藪なり

第百二十四課 寒帯の論

二寒帯 南極北極の處より温帯の界に至りて
止り其廣二極より赤道に至る迄の大約四分の
一なり 白熊 馴鹿 犬 鯨魚 海馬 海豹 等多く
一處に寒帯の間ハ一年のうち日輪數月見へど
又數月没らむ

第百二十五課 温帯の論

二温帯 熱帯と兩寒帯との間より地球中
より第一の爽快なる處なり一此帯中の動物を
人の用をなれしもの別帯に比ぶれば尤も多し獸
類を馬 牛 羊 鹿 等禽類を鶯 鶉 鷄 等あり又魚類亦
と多く嘉きものなり

第百二十六課 諸帯の土人の論

熱帯に生ずる人ハ皮膚多くハ全く黒く或ハ淺
黒く一性質懶惰なり一温帯に居るものハ皮
膚全く白く或る稍白く其性靈慧してよき事を

本草口説の出来 卷之二

勤む寒帯も生るものハ形
軀矮く見識瑣細しく獵漁を
以て生業とす

第百二十七課

寒暑道を分つ論

一帯の中よても赤道不近き
程熱氣次第は強く漸く遠り
て熱漸く減るるものなり
西洋の學者地球の面を若干
の寒暑道を分つる益熱氣の



多少を視て之を別ちたり亦道の左右も熱氣
猛烈よりて草木盛んに茂り氷雪を見らざるな
く南北二極の處はおめてハ氷雪年中の草
木生ぜぬ絶てく物の跡なきものなり

第百二十八課

寒暑道の土産論

寒暑道の第一は熱氣一番烈しき處よりて辣料
を土産に薑薑葱胡椒などの類なり又涼な菓
實を生じ椰子蒸餾菓木等の如き是なり第二道
も重小香料を出る肉桂没藥乳香等の如き是な
り亦羨き菓實椰子鳳梨棗子酸果等の如き是を

小ハ亦一なく生むるや中り尤も其脆く柔の
なるもの下ても巧い法を用ひく培養より生
植するものあり

第百三十二課 其五

草木のうら小敷道に生むるもの少のらず熱地
小産むるものも夏の時分を寒地小生じその
あり今諸方の草木をまじへ聚めて我日本の園
圃の中ニ栽附るによく其生植つを見を地球
上何處の産物よてもその本地の熱寒小く
らや假初小るその草木の性之順に培養する

時々地を換るやいつども生せざるものとを
知るべきなり

第十七篇 人間友際の論

第百三十三課 家族の論

同ト父母より生きたる兒女ハ一の家族な
り其一家族の兄弟姉妹より生れたる兒女を
合せ稱して親族といふ親族の最も親しき者
父母兄弟姉妹なり其次ハ祖父祖母伯叔父母堂
表兄弟姉妹なり

第百三十四課 商賣および耕作の論

文章の巻の終

工人諸商賈等ハ市街小住居
 一中小色工人ハ人と諸機械
 を以て絹麻木綿の諸織物利
 器錦帛其外日用の什器を作
 り農夫多その働き人と共小
 村郷小居り田畑を耕作を業
 とす農工商各々本業を守り
 て互によく相資け合ふなり



第百三十五課 商工等の業の論
 雜貨市帛諸器具等を賣る者を店商人といひ帽

子師縫工鞋工等を手職人とツひ時斗師殿治屋
 指物屋杯を細工くとツひらぐら人の處に至
 りその業をなして工錢を獲るものを傭人とい
 ふ童子より師匠小従ひ年期を限り約束して其
 業を習ふものを徒弟とツひ

第百三十六課 傭人の論

何の事をなれや拘らず日を數へて工錢を獲る
 ものを働人ツひ家内小使ハる男女を僕婢と
 といひ富家ハ多く僕婢を召使ひその役を勤
 む是を以て貧人傭人多その力を勞して工錢

獲るもの衆きなり

第百三十七課 學業の論

凡そ家業の中不必が學ぶるや深く識ること廣くして能くその業を習ひ熟するを要するものあり之を學者の業と云ふなり道義の教師習讀の教師公事師内科醫師外科醫師等なる此業の屬も教師ハ心性の窒塞を通明 醫師ハ形骸の疑帶を通達以西洋ふて、道義の教師を福道教師と云ひて教法を司るなり習讀教師ハ此年を訓解公事師ハ公事訴訟小關目、律法の事を辯

解内外醫師ハ人の病を療す

第百三十八課 都會家建の論

都會の地ハ宮室房屋相連りて建ち街衢あり店あり牢屋あり裁判所あり病院あり神社あり學校あり書房あり市場あり英國の都會ありハ市場を互つるに多クハ七日ごと小一歩大市を毎年數次あり各々定まる時



何りヤリ

第百三十九課 氣燈の論

昔ハ西洋ホテも油を用ク常夜燈を燃
市中町々の夜を照シたり近クハ石炭の氣
用いて油小代つて夜毛殆ど晝の如く都會城下
何處もなまなまハナリシ其氣ハ石炭
を燒ク得ルコトハ最モよく燃ヤマク至
て便利アリ鑛筒を地中ニ埋メ氣を引テ各街各
尾小ヨリテ燈を照ト一ハ盜賊の思を
防キニホテ道路をテテ行人ハ都合ヨリ

第百四十課 水の論

水ハ山ヨリ出テ河ニ流レ以テ人の用を為ク
と擧テワ小ヲサズ東京トテハ玉川の流を引
テ地下小大樋を埋メ府下小分派シテ遍ク諸人
の用に給ス西洋ホテも亦このコトアリトワ

第百四十一課 火の論

諸邦火を燃シテ食を煮ルハイナ同ト寒國ホテ
ハ火小ヨリテ暖リを取リ本邦ホテハ多ク
薪炭を用ヒ國ホリテハ或ハ燐炭を用フ澤中
ヨリ掘取るとワ小西洋ハ多く石炭を用フ石炭

文藝の集

卷之二

七六

石炭の類ナリて地中より掘取るものなり本
 邦小石炭何れやいへど一日の多き
 小堪へど薪と木炭とハ殊小多く何れや便よけ
 れバなり

第百四十二課 住居ハ必き風氣を通まて

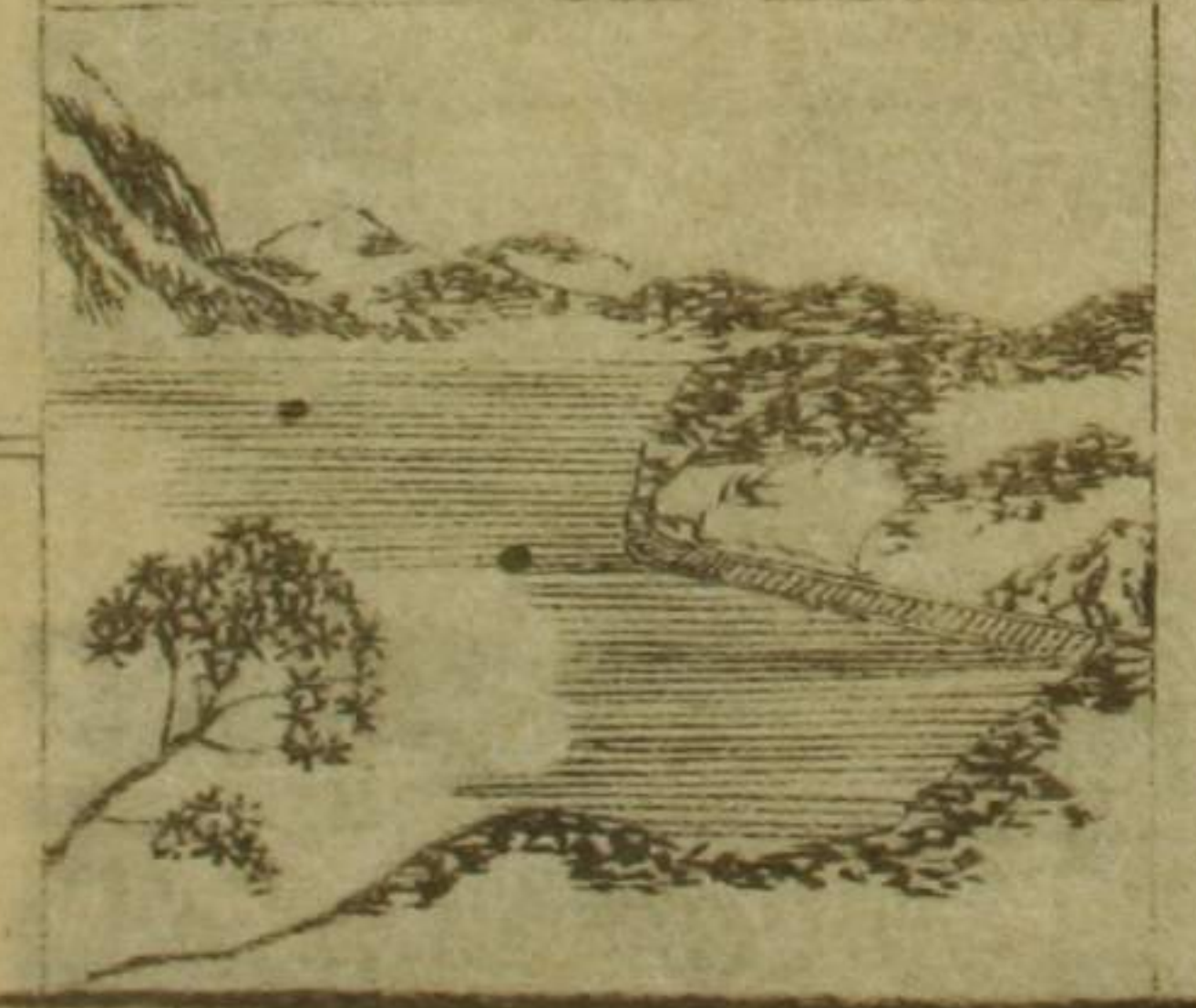
論

清浄の空氣乏しき時ハ人身舒やうなり可た
 故に家屋の濕多きものや病人の卧る處と人の
 常小寝るともろやにおめてハ必きよく空氣を
 通ぜしむべし又居室にて多く火を焚き爛

を燃もと他ハ空氣を燒つてもそのの急宜しく
 風を通れべし立籠りたる處小居て業を作まて
 のを時々外へ出て散歩を

第百四十三課 道路及び鉄道の論

大抵天下の諸邦とカ道路あり
 りて諸方の土地互に相通じ
 一むその路におめてくハ或
 ハ步行一或ハ馬小騎或ハ車
 ト座しゆく車ニ輪のこ
 の四輪のこのらり甚しき



又...の...
 ...
 ...

ハ蒸氣車せんきしやゆく鉄道てつだうをゆくハ
何なにもなかり蒸氣車せんきしやハ數車相連すうしやあひらひ
なりて或あるハ人を載のせ貨かを載のせ
せ鐵道てつだうの上うへに行いき走こるも
甚おだ速すみくなり水みづの上うへを行いく
くときハ船ふねを用もちふ船ふねハ或ある
風かぜを藉たすけ或あるハ蒸氣せんきの機勢きせうを
藉たすりて行いくなむ

啓蒙知恵の環巻の二終



啓蒙知恵の環巻の三

於菟子 譯註

第十八篇 國政論

第百四十四課 日本にっぽんの論ろん

皇國みかどくにの占しほハ大八州おほやちしゅう國くにと
いハ豊葦原ゆふあしはらの水穂みづほの國くにとい
ハ後のちニ野馬のりま基もとといハ日本にっぽんの
野のハそのとなく最もとも古ふるく
て太陽たいやうの生なり出いでゆせる本もと



處とつし意あり今區別し
 八十四州とあり中小就て山
 城州お西京をおき武藏の州
 お東京より政一君より出て
 萬姓いなる星拱し
 皇統ハ日の御繼神の御種の
 し承け継ぎ玉ひく萬世易る
 あり今一官制政體お至つて
 新救のハハ常し



第百四十五課 英國の論

英倫蘇格蘭阿爾蘭の三邦を合せて不列顛國と
 といふ英國のらやなまその政令法度議事上下
 二院の定むる處小由る此二院一つは上院又公
 侯院と名づけ一つは下院又平民院と名づく其
 評定する律法等も必は國王の批准を経る小何
 らぎ皆も國內お施行ふとや
 第百四十六課 惡事をかそとの快論
 國法を犯きそのハ刑罰を受べし余人の物を竊
 る取るを偷盜といひて英國よてハ此の罪を

文章口惠の課
 卷之三
 二

治まら小禁獄の科を以て一假單やて別人の華
跡名字候仮りて欺詐をなれとのハ外邦へ流罪
や一謀叛人殺をせむものハ死罪に處せりとい
ふ

第百四十七課 立合役吟味の論

立合役吟味の法ハ不列顛國母河の一の良法な
り其法ハ裁判所小控え裁判役事を裁判せり時
民間より十二人出て其坐小列り訴訟をつまひ
ら小聞糾一以て訴へらるゝ人の罪ありと否
ざるやを決断せり此十二人訟の辭を聴き

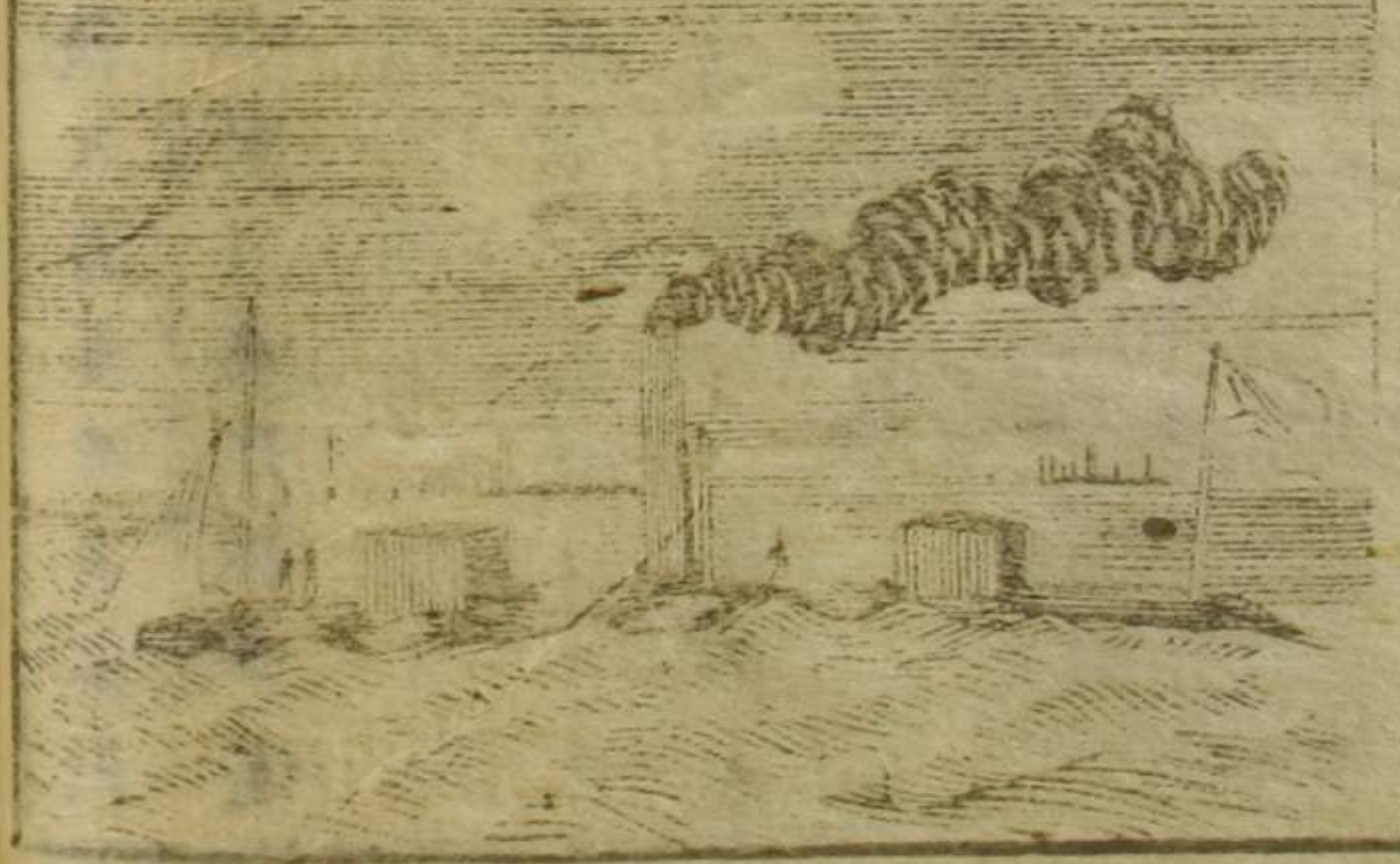
證據を辨し訴供を察し然る後その罪の有無候
定めて裁判役小上達せり於て裁判役法を
照しそ素を定む

第百四十八課 戦の論

凡そ國の災ひハ戦より重きものハけりト戦を
と死を人を殺し居宅候劫り田地を變りて荒
蕪くありて城邑村郷を多く焚毀らる且富きもの
をいへゆりりかすし其妻をして其夫をりり
りりめ兒女をして其父母殺せりりり其他諸候
の恙事災難多くハ戦より出來るゝや多し

第四百十九課 陸軍及び海軍の論

陸軍を騎兵歩兵砲兵なりて
 幾隊あり其數甚多
 其の中近衛兵一東京に屯し
 て禁闕を衛り餘ハ八鎮臺の
 本營分營等に令れて國家の
 不虞に備へく民の安隱を守
 護も海軍ハ軍艦ヲ居り邊海
 の防を爲し兼て海内ハ周行
 して商人の貿易を保護も海



陸軍とるに其兵老年小なり
 一もの或ハ湯を受し一もの等
 ハ朝廷の恤養成うべき生涯
 を送らし玉ふなり



第四百五十課 通用金の論

通用金を本邦のま新小金銀銅以て鑄造玉へ
 リ二十圓十圓五圓二圓一圓の金銀
 十錢二十錢十錢五錢の銀錢
 一錢半錢一錢の銅錢あり
 厘ハ錢の十分一錢ハ圓の百分一
 あり故小十厘ハ一錢より百錢ハ一圓あり
 往日本

版口東の景
 卷之三
 四

より通用せし一兩ハ即ち今の一圓ハ一歩
ハ今の二十五錢一朱を今の六錢二厘五毛小當
るなり又金札ハ夫々通用レ

第百五十一課 家産の論

房屋家財書籍畜類田地林木及び製造する處の
諸器等ハみなおまを家産とつふこれに父母或
ハ親歿より傳へ受くるものあり又ハ自己の敏
動小由と得るものあり世ハ餘今の金を持つ人
ハ毎小若干の財を損之國家ハ有用なる業と人
を濟ふの善舉との助勢を爲せりたやへハ病

院又を鐵道を起し等のらやのごやに是なり

第百五十二課 租税の論

租税ハ民より納むる錢小く以て國の用ニ供
するものなり凡家業ハ安んト保さんごや代
一強奪詐偽ハ遏止んことを欲し律法ハ行さん
みやを欲し國々平ら小治まうんごやを欲さん
ハ人の情なり其為小諸官負ありて民ニ代つて
ふを治め以て人々小其患かうしむ其有司
の禄ハ則り聚むる處の租税より宛行ふなり

第十九篇 列國の論

第百五十三課

亞細亞歐羅巴の三洲諸邦

の論

地球の面を五大洲に分る亞細亞
細亞といひ歐羅巴といひ阿非利加といひ亞墨利加といひ
ひ大洋洲といふ此五大洲の
うらほく又各々邦國を令つ
とせ甚ど多し亞細亞洲に屬
るる國の著るは日本の
支那印度暹羅波斯亞刺伯上



耳其等なり歐羅巴洲に屬する國の名を魯西亞奧地利字
魯士是班牙葡萄牙以太里不
列顛佛蘭西比利時和蘭等を



第百五十四課

阿非利加亞墨利加大洋洲

三洲諸邦の論

阿非利加洲に屬する國の著るはエジプト
巴利幾内亞よく其の極めて南なるは即ち
喜望峯尼給魯倫阿比西尼亞等なり亞墨利

加洲に属するものハ合衆國加拿他墨西哥巴西
等の邦なり唯大洋洲に属する處ハ國々稱せ
て此島と名づく三大部類に分ちて東なる
を波里尼西亞ヤハ西なるを馬來西亞ヤハ
南なるを澳大利ヤヤハ

第百五十五課 野劣なる國民の論

世ハ甚多野劣なる國民あり
その民全く教化なくして
獸皮を衣服とし野山の菓草
の根を食し或ハ獸を獵て



其肉をやる亞墨利加南北の
二洲澳大利亞新西蘭の二島
ハ其土人ハ是野拙な
る者やかくのごとく阿非利
加内地の黒人も大半ハ然り
と云



第百五十六課 野遊する國民の論

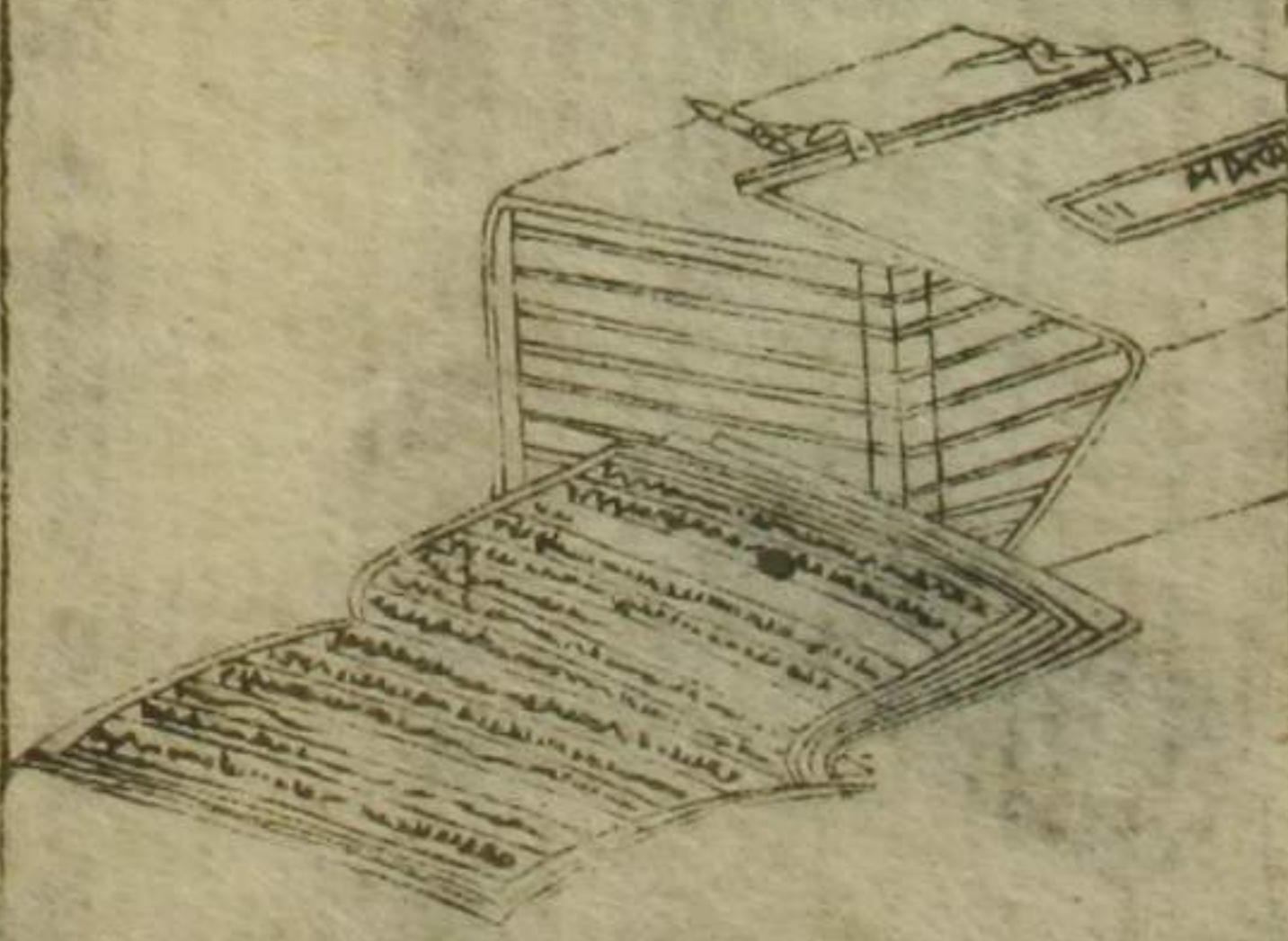
國ハ都城かく定りたる住處なくしてその民諸
方ハ遊徙き葛草を尋ねまわりて羣畜を牧し
或ハ曠隙を伺ひ隣部を侵し戦ふものを皆野遊

其中小就て十くそ技藝學問
 小熟しそ民百姓ハ猶愚蒙の
 もの名しそはちきより以外
 歐羅巴の邦々及び亞墨利加
 の合衆國ハ其民天下の中の
 最も文明開化なるものぞき

第二十篇 通商交易の論

第百五十九課 交易の論

諸國の産物同トら代多く米を産まそり多



く麥を産まそり多く葡萄を産まそりあり無花
 菓橄欖果橙柑香料茶加非果麻棉花糖烟葉草樹
 膠等の物を感産まそり邦もり又國によりて
 其の製造の品物に因て名を得さるものも何
 り一國の産物を以て他國の物品中易ありあや
 を交易とつふ

第百六十課 輸出輸入の論

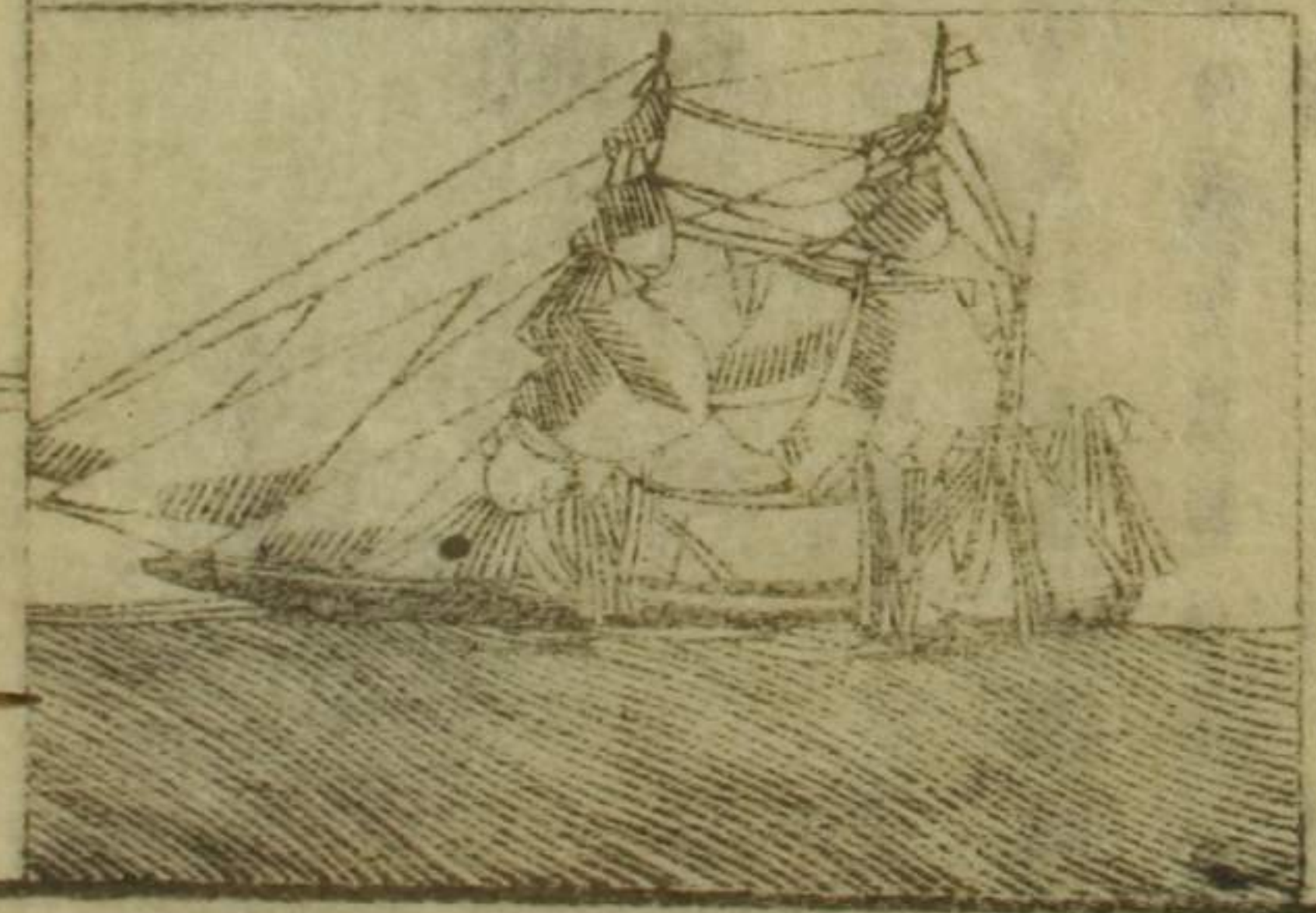
本邦輸出の品ハ鐵銅木臘石炭蠶卵生絲真綿茶
 昆布膠菜乾海老鰯干鮓材木樟腦及び製造の物
 漆器陶器等なり輸入の貨ハ錫亞鉛鐵葉水銀

藤油類 石礮硝子類 象牙 珊瑚 龍甲 金中更紗 唐棧
 羅紗 吳呂服 羅襪 革細工 樹脂細工 書籍 漆粧 藥種
 酒類 砂糖類 南京米 洋の外穀類 及び 都て 機巧の
 器械 日用の器等 一々 擧て 數へ ざく 英國 内て
 輸出の品ハ 鐵 銅 塩 及び 製造の物 輸入の品ハ 葡
 萄酒 茶 棉花 材木 金銀等 多ク 佛國 輸出の品ハ 葡
 萄酒 燒酎 菓實 及び 粧飾の貨等 輸入の品ハ 棉花
 如非 香料 あり 魯國の輸出品ハ 脂油 皮韋 毛革 及
 ひ 麻等 あり 輸入品ハ 多く 熱帶の産物 製造物等
 あり 支那の輸出の貨ハ 茶 絲 等 あり 輸入の貨

ハ 棉花 木綿糸 布足等 あり

第百六十一課 船の論

國々 相隔く 其間ハ 洋海の
 水あり 舟の多し 船を用ひ
 て 往來せしき あり 舟の船帆
 を 揚げ 風に 藉りて 行く 力 何
 う 又 機械を 仕掛 蒸氣 水 因
 て 動く もの あり 或ハ 人を
 載せ 又ハ 荷物を 運送 船を
 商人の 所持の もの 多し 船中



舟で働くものを水夫といひ
船を管する人を船頭といふな
り



第一百六十二課 機械の論

世の機械の便利となりて其の廣く或は人力
の能くする所を補ひ或は其の乏しき所の勞苦と費
費と省く處に掣あり其あり及び打木の機械
何れも餘長柄の鉤及び連柄の苦を省ぬあるべ
し蒸氣車鐵道及び車は其も馬ハ負ふの勞を省
き人ハ其の勞を省ぬがごとし

第一百六十三課 言語の論

心に欲するやころ心は思ふやころ及び心に感
ずるあやハる言語を以て言顯せたり人物動
物居所諸徳諸惡その外端緒よりて指の指さき
そのハみな言語を以て各々其の名を附くるこ
と能ハざるものなり言語に物の形容を以てハ
てその有り剛き柔き新き舊き等のとせむのこ
と又動きを以て其の有り切る光るのま
じし口は言ふあやしく文字にて之を寫くらや
も得べし

第百六十四課 歴史の論

歴史とは往時の事を述べ、書を著し其に至つて古
 き者のハ世を如何に創りて造るやの傳記なる
 王の至つて肝要なるものハ天理人道の神教
 たり我日本ハ歴史ハ天開け地闢る日月の現
 出より載せり代々の帝王の威績偉勲古今の
 成敗得失忠臣孝子姦邪の跡等を記し紀元以前
 ハ鴻荒の世由五世紀ハ明らんに知れり
 紀元後多々世系明らるるふく長くハ二
 千五百年余あり英國の歴史ハ凡そ一千九

百年支那の歴史ハ四千餘年の世系ありといふ

第百六十五課 新聞紙及び書籍の論

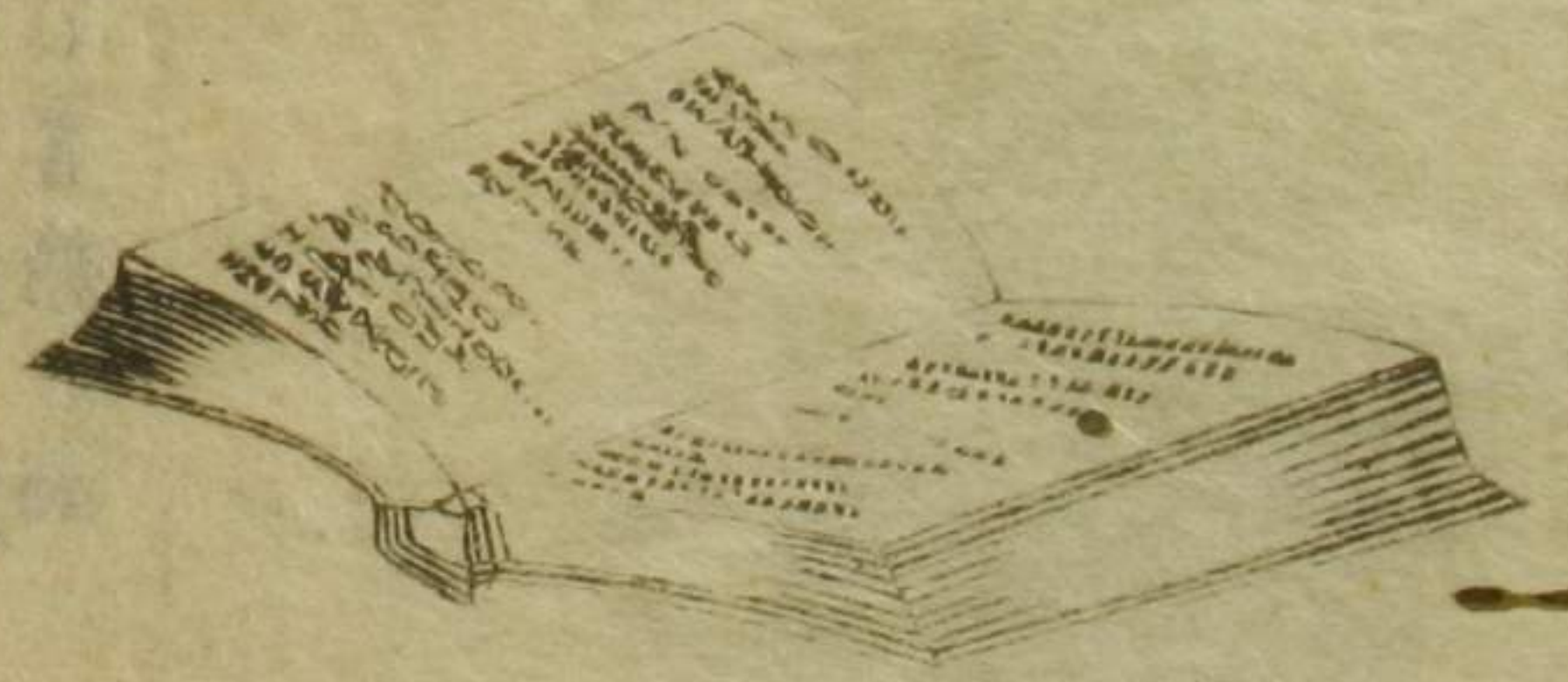
人の知識見聞を廣むるもの
 ハ新聞紙と書籍ハ若くハ眼
 手筆新聞紙多く出来書物
 の出版もはやく盛んハ
 教道藝術ハ益あるもの日々
 多し新聞紙を災害罪咎生
 死職業商法發明玩喜のや
 り其本一切人に益あり人



文章の思の長

を誤ししむるやハ盡く載
 て漏れなく實小家を出
 まし世の故坐な知識
 を登きものなり書物を作
 る一つに人を教へ一つ小
 人の情代快ふる為の由
 の由て人よく之を讀まハ必
 ぎよく其知識を増し必ぎよ
 く其幸を大ひおせん

第百六十六課 身を脩る論



身を脩るハ人間第一の務なり其法ハ他ならん
 博く學び力たく行ひ耳よく聞き目よく見ふ
 何れ何の事業ハ拘るもを眞實に心を用ひて專
 りに務る時ハ地の身上達せざるあやなく尊卑
 貧富をいへば人を愛し天に順ふ心常不絶えや
 る時ハ其徳増益せざるをなす
 第二十一篇 物の質及び其動き等の論
 第百六十七課 物の質不斉性の論
 宇宙の間ふりるやありゆるものハ歸まるとま
 り只有形無形の二種のも形ちりるものハみ

文章如惠の卷 卷之三 十三

本質はりて大抵おぼろげな物と云ふべし凡そ目に見ゆるもの物のみ形有形の物なく悉く物質を積んで成るものなり而して其物質は分ても分ても尚分つべく遂に極めて細かく目に見えざる程に至るべし此細うに至りたるものを第一けき物質の分子と云ふ若く細なる分子と迄分つべき性質は故に之を物質の分子と云ふなま花の香氣、乃ち其分子よりなる所

第百六十八課 物質に無盡性なる論

凡そ物の本質は毫分も之をなくするものありあざむきもの有り人よく石を碎き搗て粉をなるといへども其粉をなほ存して盡くあやなし又能く水を蒸く乾くも其も但し其粉を變じ蒸氣となりて去るのみ雨と冷氣は又凝結す元の水やなる人よく炭薪紙等の物を焼くといへども其烟と灰とを尚残りて盡く是れも亦る物質の無盡性なり

第百六十九課 物の引力の論

物質相引の力あり之を引力と云ふ之を由く物

又... 十

みれ常に結び聚る炭木石等のごやたもみれ其
分り此引カゆゑに凝り聚りて飛を成また之
代凝集引カとつ小物の地に附つて動
おても地の引カに因る之を吸集引カとつ小地
の目を旋つて行も亦日の吸集引カ小頼るあり
海綿ハよく其小孔を以て水を吸ふも毛管
引カヤつふ

第百七十課 物質各異なる論

凡そ物の重あらざるハ一尺其質におめて
各々異なる物ハよりて軽きものも又甚だ重きも

の何り又甚だ硬きもの何り玻璃鐵の如き是左
り又甚だ軟き者ハ木紙膠鯨骨のる是左り又
甚だ脆きものあり玻璃磁器の類是なり又鑽類
丹多搗て箔となればきあり又線條となれば
この如し

第百七十一課 物の動く論

物の動くところハ其居處を易ふるよ中な
ハ動て惣身に運り心の臓動て血液吐納肺の
臓動て氣を呼吸し物ハ激しき動つて其
激するをカヤつて球ハ撃てバよく動て滾行な

又物の細小なる小至るハ頭
微鏡をもちて見るありや
をぞるもの多し

第百七十四課 物の寸尺の論

凡そ物多くハ八度を用て其大きき度度るべし
尺の内尺寸あり寸の内尺に分り今の内尺あり
十分と一寸を一寸と一尺と尺に曲尺あり
王鯨尺あり布帛類ハ八鯨尺を用ひ家倉机籠箱
等の物ハ曲尺を用ひ地面を量るに用敷明
敷里敷を用ひ

第百七十五課 色の論

見了所の物皆色あり大や水とハ藍色なり草ハ
緑に血も紅なり虹にも其數七色ありその中只
紅藍黃の三色を正しき色とし餘ハ此三色
の相雜つて成るものなり白を色に兼へた
黒を乃ち色の悉く絶えざるあり

第百七十二篇 機械力の論

第百七十六課 桿の論

諸職人より器皿機械を用ひて秤の働の助と
其中小桿と名づくものあり重き物ヲ舉動

故書口息の原
卷之三

小多く之伐用ふ西洋火箸ハ一つの桿ホシク火
爐中の紅炭と燃け鋤も一つの桿ホシク土場
切り起し又よく之を移し動るを

第百七十七課 其二

鉄を以て物を剪るにハ先づ其兩股を指不挟
さを出け乃ち是二本の桿なり轆轤師其車を旋
らまに脚を以て踐ぐ其力を用ふ龍吐水の柄ハ
乃ち桿の曲まるところの力を手と以て其の端
をこげし力と生も鉄板を用ひて鉄釘を扱
と亦曲まるとなるとのなり

第百七十八課 輪と軸の論

輪と軸と依用ひて重き物を擧ぐる仕抵何り船
の上のりて此器を名づりて絞盤やいひ
鉄或ハ綱と絞盤ハ繫け船と其の練乃先に繫
以て之を擧げ降下用ふ千斤稱車と車底石も亦
輪と軸と相合ふて用を為まな

第百七十九課 斜板及び楯子の論

板もしくる梯とて斜に
のまぐ貨物と滾りし稍高き
處へのまよけもとのと斜



板といふ船は水に卸さふと
斜板は用ひ搦子ハよく木と
裂くは用ひ又石炭山石礮小
おろて石炭或ハ石の紋縫小
挿入れて開き割るに用ふ又
之と名づる者く失入る者

第百八十課 螺旋及び滑車の論
螺旋を壁盤に多く仕懸桿を以て之を旋轉し
上げ下ろす螺旋の線條ハその全體に高く凸起



と纏る條あり若し其隙の間密にぬれを疎きも
のよりも一段轉し易しと滑車を重き物と等
しに用ふ索一條ありくそのいと繞ひ通り索の
行不随と滑車自らうごけ同しく轉るなり

第百八十課 機械装置の論

機器ハ如何に至妙小造るといふともしぼり
動かしむるみや何れをば必す他の力代用ひ
始りよく運轉の力と致すものなり其用
カハ人力風力水力蒸氣力等なり車礮石の如
ハくの手づくこと轉し風車ハ風の力と用ひ水

車ハ水の力とより動き蒸氣機械ハ蒸氣を用
て運ぶ如く若し其力暫く絶つと亦た不
機械ハおのづから止まるなり

第百八十二課 機械力の用ひの論

機械ハ力と省き時或省くとの形を假如槌を用
ひて釘と打ハ石礫と用ふるに勝り車砥石に
鑿と磨ハ平石を用ふるにほきを鋸と以て木を
挽割るハ斧を以てするにまさり且つ木材を費
やば車鋸と用ふるに又手鋸よりも巧に
捷さがあせり

第百八十三課 天然の機械の論

動物の体と觀るに天然自然
機巧の装置を具ふるを實
小多し人の手足は即ち是桿
の類なり兼て又骨のうす
動く力を具ふ橋拱ハ極を通
の合せり成るべくくくの
足の拱もまた極を合せり成
る動物の牙ハ即ち自然の又
物あり蟲類の中ハ螺を



能く器具なく能く木や石を穿つものも有り

第二十三篇 五官の論

第百八十四課 眼の論

人の身にも五官有り視聴嗅味覚の五を司るとの形を視るみずを司るを其を目とくを日月の光を司るに物の色を分る形を辨る日月星宿蒼天青草莖花を見て了然に何物とす見分は然るを得るなり目の見よ其ものを盲と謂ふ盲者實に良むべからざるものあり



第百八十五課 聴言との論

聴くは依司るものハ耳なり人ハ耳あるがゆゑ小物の聲人の言を聴き絲竹の音を辨ふべし見女ハ人の言を聴き其聲に效ふて遂によくいふらやを覺る生れをうづ耳のきかえ忠を啞やつ小啞者の言ふらやの多きをうづハ初めより聴くあやちきもさるが故なり其心に思ふ處ハ直に其物を指し或ハ手勢物摸しく人に合意せしむるのみなを

第百八十六課 味ふと嗅との論

味ふと嗅との論

補バ之を發せし能くするが如し

第百八十九課 身軀健康の論

飲食にあたりて身を養ふは健康を保つに至る運
一やと若し飲食も過りて其身を壞るに至る運
動ハ健康に益つれども其度を過りて過不及
何トハ却て健康を損ふ本となる空氣ハ健康に
必用のもの身を清潔にするハ健康に必用の事
形まどと若し居處の空氣穢く或ハ常の習俗汚
垢かるや此ハ健康を保つに何と云ふに

第百九十課 身に垢缺ある者の論

人の世に生るる弊ありしものなり 弊ありしものあり
り 聲音あるものあり 跛脚なるものあり 斜眼な
るものあり 手足彎曲なるものあり 身材長大
しものあり 偉丈夫と呼ぶものあり 身短くしものあり 矮子と
名づくものあり 若し身軀の垢缺ありしもの
或見バ決して之と欺侮するべからば宜しく血
助くべしなり

第百九十一課 疾病の論

一身の甲斐此部位其功用宜きに適ふと云ふ其
身健康な若し一處に其運動常時

あきた則ち病となる力を勞ふる多や甚く多く
飲食其宜きを得れば氣甚く清浄なれば今日
業十神を損ふ事等なき病一むる本と有
る病の人に縁過るものあり之を傳染病やつ

第百九十二課 死亡の論

身既に死まるときは五官等の能を形する生る時を
靈氣の動く物の觸るるや何まて身必す之を
覺ゆ死まるとは靈魂身を離れく身覺るは身
や靈魂の二つを配せく一人の心を成す身
る一く一く靈魂ハ見るべし此身ハ死すべし

一く靈魂ハ死すべし

啟蒙知恵の環大尾

啓蒙先生の玉
卷之三



於菟子譯述

第三大區
小三ノ區
四番町一番地

明治五年壬申十月新雕
同 七年甲戌五月改正

東京書肆

牧野吉兵衛
山中市兵衛
蓑田精三郎

